婦人之友

第二卷
第十二號

謹告

本誌は、婦人教育及家庭教育、其他緊要なる各種の問題に關して、讀者相互の質疑應答を掲載す、但讀者の應答なき時は、記者之に應ずるものとす。

本誌は一般讀者の寄稿を歡迎す。殊に家庭の日誌、各地に於ける婦人教育幼兒保育の狀態、婦人問題、婦人兒童の遊戲、手毬歌、子守歌等に付きては、詳細なる報告を望む。但質疑投稿は、凡べて左の規則によることとす。

一、用紙は、白紙二つ折、字詰は、半枚十行廿二字詰、體は楷書。

一、一事項毎に別紙を用ひ、別口に住所氏名を記入せらるべきこと。

一、原稿は、一切返附せざること。

一、封書の表には、凡て婦人と子ども投稿と明記せらるべし。

一、投稿にして、有益と認めたる時は相當の謝意を表することあるべし。

一、照回は往復はがき又は返信用切手封入のこと。

發行 毎月一回五日發行○第一卷第一號明治卅四年一月二十日發行

定價 一册金拾錢○六册前金五拾七錢○拾貳册前金壹圓拾錢○郵稅各一册一錢○切手代用は壹割增但壹錢切手に限る。

入會者 は會則御承知の上にて東京女子高等師範學校附屬幼稚園内フレーベル會あて申し込まるれば雜誌は無代價にて送呈すべし

讀購者 は總べて前金にて東京日本橋區本石町三丁目二十三番地金昌堂へ御注文のこと○送金は神田今川橋又は日本橋室町郵便取扱所受取人金昌堂あてのこと○見本は切手二錢に限る○十二枚封入にて申し越されたし○前金相切れ候節は赤にて●印を御姓名の上に附し候に付き早速御送附下されたく御入用なき時は御斷り下されたく候○轉居の節は新舊共に御通知を乞ふ

編輯 に關する御照會及原稿御寄贈はすべてフレーベル會あてのこと

廣告料 一頁十圓半頁五圓

明治三十五年十二月二日印刷
同 年十二月五日發行

不許複製

發行兼編輯者 東京市本郷區元町二丁目六十六番地 江崎政芳
印刷者 東京市神田區錦町一丁目十九番地 日下計主
印刷所 東京市神田區錦町三丁目二十五番地 熊田活版所
發行所 女子高等師範學校附屬幼稚園内 フレーベル會
發賣所 東京市日本橋區本石町三丁目廿三番地 金昌堂

大賣捌所 東京東京堂●同東海信文合資會社●同北隆館

婦人と子ども第二卷第拾貳號目次

子ども

お姫樣の行方（やまとの翁）●入道の降參（雨情）●蛙遊び●考へ物●一口話

家庭

子どもの讀物……濱子
今昔いろは料理……石井泰次郎
家庭雜感……その子

學術

幼兒の特質……文學士…松本孝次郎

史傳

節女阿正の傳……米溪
黑澤登幾子……下村三四吉

文苑

旅のすさび……鷺水
親しき友に……木の下いつ子
暮秋……東くめ子
賤の女……敏子
歌の曲……つねを
勇ましき若武者……澪譯
袴の贊……相賀調兩

說林

明治三十五年を送る
本邦古代保育法の一斑……下村三四吉

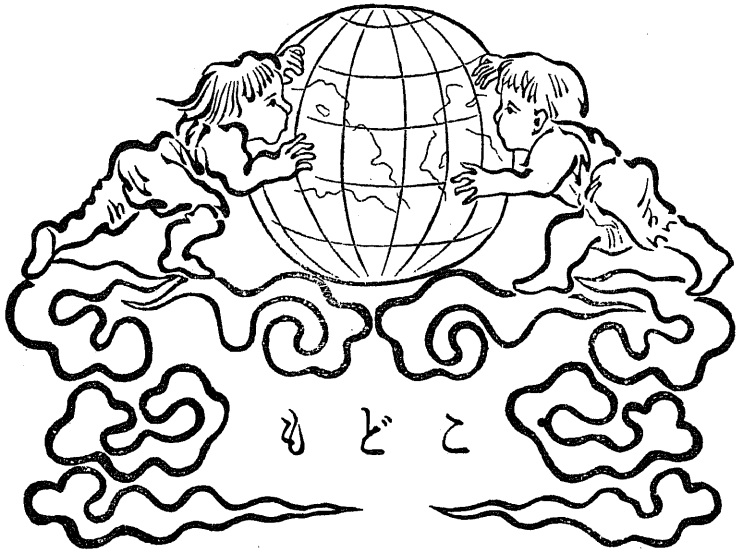
雜錄

東京市養育院感化部……ひさ子
八丈島の風俗……やて
秋星窓日記……北濤野人
東京の十二月中行事……せく生
他を批評することに付きて……野本生譯
十二月和名と其異名……せく

彙報

●華族女學校行啓●女子高等師範學校●東京音樂學校演奏會●東京女子美術學校開校式●婦人讀書會●足利幼稚園●歌御會始御題●愚生生徒の敬禮法●教員檢定試驗問題●幼稚園と近視眼增加との關係●會報

婦人と子ども
第貳卷第十二號



お姫様の行方（つゞき）

やまとの翁

免してくれゝば、お姫様の居所を知らしてやる、といったもんですから、少し指尖をゆるめてやった所が、其小人のゆーにわ

一体、私わ、地面の底に住んで居る一寸法師なんですが、地の中には、私見た様な小さな人間が、まだ澤

山居ります。ですから、あの三人のお姫様の居る所も、私にはちゃんと分って居ます。夫わ深いといったら、ほんとに深い、深い地面の底に居られるので、恐ろしい、頭の澤山ある大蛇がお姫様を一人づゝ張番して居ます。そこえ行くには、深い空井から、籠に乘って降りて行くのですが、吃度、刀を拔いて持って行かねばなりません。

こーいって置いて、その小人わ、どこえとなく消えて失くなりました。そこえ二人の兄さん等が歸って來ましたから、弟わ小人から聞いた話をして、夫から、三人連れ立って、其空井の所え出かけました。

さー、誰から先きに、井の中え這入ろーかとゆー事になって

又籤をひーた所が、一番年上の兄さんが、先に這入ることになりました。そこで、大きな鈴を片々の手に持って、兄さんが籠の中に這入ると、上から、二人が綱で以て下ろす。若し降りて行って何か危い事があると、下から鈴を鳴らすから、夫を合圖に急いで引き上げるとゆー約束なのです。

やっさ、やっさとゆー懸聲で、上から降ろして行きましたが、暫らくすると、ちりん、ちりん、ちりん、ちりんといって、下から烈しく鈴が鳴ったから、さー大變だ　引き上げよとゆーので、上の二人がやっさ〳〵と一生懸命で引き上げました。所が兄さんわ、顏色を眞青にして上って來て、下わ眞闇で、何だか氣味の惡いものが居て、とても底まで下りて行けぬとゆーので

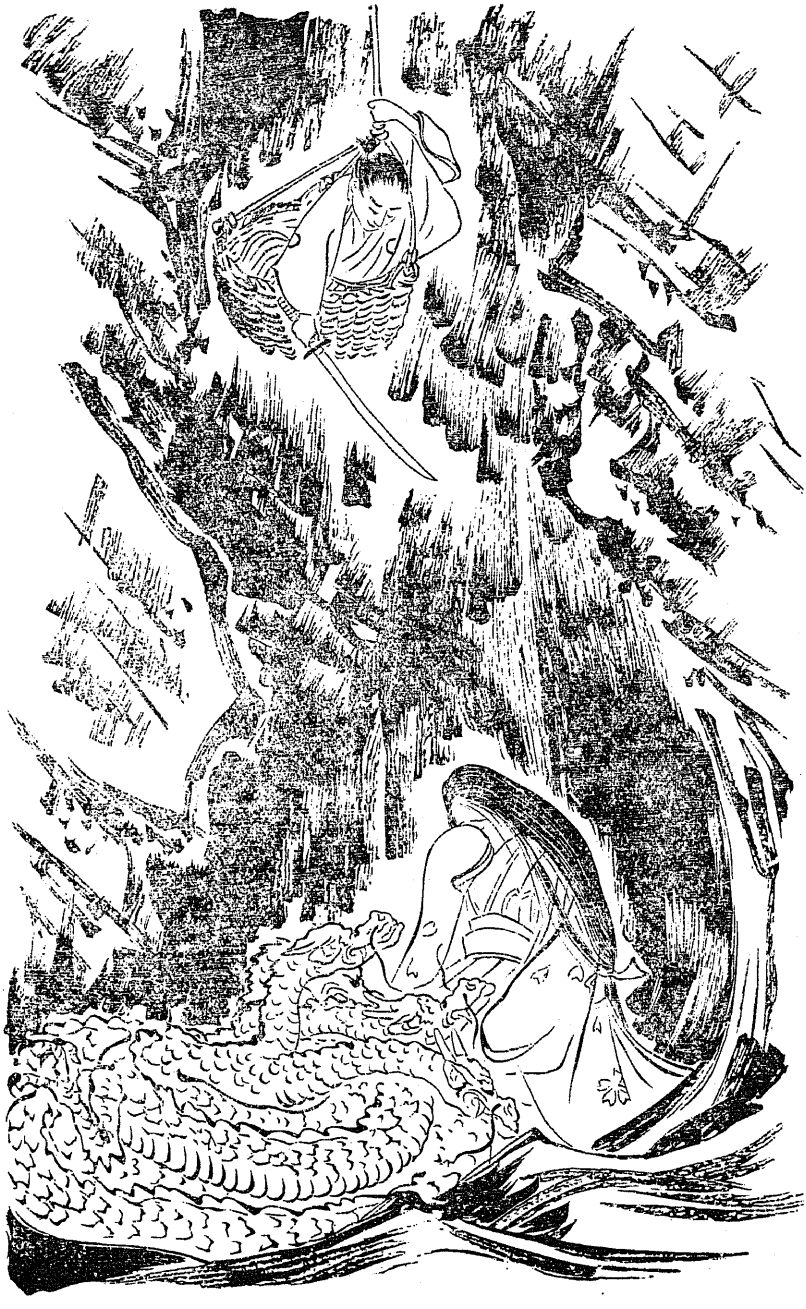
す。

夫から、今度は、二番目の兄さんが降りて行った所が、行くと間もなく鈴がなって、これも引き上げられました。

さて、一番お仕舞になって、いよ〳〵弟が、降りて行く事になりましたが、弟わ、何んでも、地面の底まで行って、お姫様をお助け申さんければならぬとゆー考で、十分仕度をして、降りて行きました。さて、だん〳〵降りて行くとゆーと、下は丸で眞闇で、何ともいえない變な臭などがする、氣分が何んだか變になって來る、けれどもそんな事に構わないで、とー〳〵底え降りて行きました。

そーすると、地面の中わ極々〳〵靜かで、少しも音などは聞えま

せんけれど、たゞ時々向うの方から、冷たーい風がひゅーと吹いて來て、其風の冷たい事といったら、丸で身體が切れ相に思う位です。そーして其風が吹いてくると夫と一所に、ごーッごーッとゆー恐ろしい音が聞えます。『ハテ　これこそ大蛇のうなり聲だな』と思いましたから　そこで小人から言ー付かった通り、腰の刀を拔いて、其柄をシッカリ握って、そーっと　岩の壁の隙間から窺いて見ると、まー可愛相じやありませんか、一人のお姫樣が　まことに、悲しい、悲しい顏をして　ちゃーんと座って居らつしゃると、其側に、頭の五もある大蛇が　のたくって居て、其の頭をお姫樣の膝の上に、のせかけて居るのです。



これを見た弟わ、もーじっとしては居りません。いきなり岩の隙間から、飛び込んで行きました所が、其大蛇が恐ろしい頭を五つながら、持ち上げて、火の様の舌を吐き出しながらやって來ましたから、弟わ手に持った刀で以て、五つの頭を殘らず切り落として仕舞いました。すると、お姫様わ、夢だと思う位お喜びになって、弟の膝にもたれて、涙を流して泣いて居りました。

さー、一人わ助けたが、これからまだ、お二人を助けなければならぬとゆーので、弟わお姫様をそこに殘して置いて、だん〳〵奥の方えと進んで行きました。そーすると、二番目のお姫様の所には頭の六つある大蛇が居るし、三番目のお姫様の所に

わ頭の七つある大蛇が居て、番して居ったのでしたが、弟わ少しも恐れないで、一ヤ其頭を切り落として、とーく三人殘らず助けました。

三人のお姫様たちわ、可愛相にお父っさんの言ー付けを守らなかッた爲に、永い間地面の底で、あんな恐ろしい大蛇に番をせられて、もーとても人間なぞにわ、一生遭うことが出來ないと思って、泣いて許り居らしった所え、不思儀にもこの豪い人に助けられたもんですから、其喜び様といつたら、中ヤ筆でも口でも言ふことが出來ない位であったのです。

そこで、これから、このお姫様たちを一人づゝ地面の上え上げなければならぬとゆーので、まづ一人のお姫様を、籠の中え

入れて、下からちりーんと鈴をならしますと、『そーら、來た』とゆーので、上から引き上げる。そして空虚の籠を下ろして來ると、下から　又一人のお姫様を入れて鈴をならす、又引き上げる、又下ろしてくる、又入れて鈴をならす、又引き上げる、とー〳〵か様にして、みんな殘らずお姫様を上え上げて仕まいました。

さて夫から、今度わ自分が上って行く番になったもんですから、自分で籠の中には入って、鈴をならしました所が、上の二人わ『さーこれでもーお仕舞いだ』とゆーので、『エンヤラヤッ、エンヤラヤッ』といって力任せに引き上げにかゝりました。所がもー二三間で地面え出よーといふ時になって、どーしたのか途

中で綱が　プッツリと切れたから、堪らない、可愛相に、何百間だか底の知れない　深い地面の中え、『ドシーン』とゆー音と共に又落っこちて仕舞いました。

上の二人は、　屹驚仰天した。『折角お姫様を三人ながら助け上げてこゝで、　肝心の弟を死なしてわ大變だ』　とゆーので　大騒ぎをしたけれど、もー仕方がない。どーしたって　切れた綱をつなぐ譯にわ行かないし、他に助ける工夫もないから、泣く止めにして、　お姫様三人を、　お連れもーして、　一度お城え歸ることに決めました。

さて、弟の方でわ　高い　高い地面の上から　落っこったにわ落っこったのでしたが、まー夫でも　よかった事にわ、別に大

變な怪我もしなかったから、死にもしないで　無事に下で助かったのです。けれども、困った事にわ　地面の上に上ることが出來ない。眞闇な所で、たった一人　何時までも　寂しく〳〵暮らして居んければならないかと思うと　もー困って〳〵いっそ　泣き出したい位になりました。『あー、こーして　已わ一人で死んで仕舞わんければならぬか』と思いながら　ひょつと周圍を見た所が、不思儀にも、笛が一本落ちて居る。『はて　之わ　お姫樣が置いて居った笛か知らん、せめて之でも吹いて氣を慰めて見よー』といって、口に宛てゝ　一息吹いた所がこれわ奇妙！　どこからとなく、前に出遭ったと同じ樣な小人が　一度に何十人となく躍り出して來た。『妙だな』と思って

又吹く　又何十人となく出て來る、又吹く、又出るとゆーので小人の數は何千人とゆー程にもなって、大方地面の底一杯に塞った位。弟わ『これわ奇態だ』と思って居ると、小人わ　口々に『お前わ　何が一番の願だ』といって聞きますから、『私わ地面の上に上って行きたい　のだ』と答えまするとと、其言葉が終るか終らない中に、何千人とも知れない小人わ、弟の頭を引っぱるやら　尻を押し上るやら　足を持つやら大騒ぎを始めてとーく弟を地面の上に押し出しました。

さて、弟わ、小人のお蔭で、不思儀に命を助かって、地面の底から上って來ましたから、大喜びで以て　すたくと走ってお城え行って見ますと、二人の兄さん等わ　丁度お姫樣を送っ

てお城に着いた所であって　王様わお姫様が出て來たとゆーので、それわ〳〵大變なお喜びで　城の中でわ大祝いが始まった所だったのです。そこえ又死んだと思った　弟も出て來たから、二人の兄さんも『これわ〳〵』といって二度吃驚して　喜んだ。

そこで、王様は　この三人の兄弟の忠義な働を感心して、いろ〳〵なご褒美を下さるし、お姫様からも、澤山なご褒美があって、それから、この三人わ　いつまでも〳〵王様の忠義な家來となって、仕えましたが、夫からとゆーものわ、お姫様たちわ、決して〳〵林檎の實など、默ってちぎりませなんだとさ。めでたし〳〵

入道の降參

雨情

むかし或所に山王丸と言ふ強い少年がありました平常遊ぶのにも山へ行つて大きな松の木を根引きにしたり大きな石を谷へ轉がし落したり或時は又熊や猪なぞと相撲を取つたり、狼や狐なぞと馳けくらをしたり、狸や狢や猿なぞを苛め散らして俺一人が山の大將軍だと威張つて居りました。

或日山王丸は例の如く山へ遊びに行きましたが、其日は何麼した事か熊も猪も狼も狐も何處へ行つたか居ない、で遊び友達が無いので倦屈しましたものですから。

『ヨシ〳〵熊や猪や狼等は皆と相談して俺を一人ぼっちにして何方へか遊びに行つて仕舞つたのだなァ、今に酷い目に遭はせて遣るから見ろ。

と大變に腹を立てゝ居ります所へ狐が藪の中からのそ〳〵出て參りました。

山王丸はそれと見るより。

『こら其方は狐か。

『ハイ、狐で御座います。』と狐は怜悧な獸ですから藪の蔭に隱れて、山王丸が眞赤になつて怒つてるのをチャント見て居りました故、茲で一つ熊や猪共を惡い者にして自分が獸類の王になつて遣らうと惡い心を出したのでありました。

『其方は熊や猪や狼共と相談して俺を困らせにかゝつたな。

『何う致しまして私はそれ所では御座いません、今朝方、熊殿や猪殿や狼殿なぞが相談をしまして今日は一つ山王丸殿に倦屈させて困らせて遣る

やうに皆が遠くの山へ遊びに行くんだからお前も一所に來いと申しますから、私はそんな眞似をしては山王丸樣に濟まないから嫌だと申しますと大層私を罵つてその儘何方へか數多で行つて仕舞いました。

と、さも〳〵本統らしく言ひましたので、山王丸も眞だと思ひましたから。

『其方は狐であり乍らも實に感心だ、それに引き換へ不埒千萬の奴は熊や猪、今に歸つて來たならヨク〳〵酷い目に遭はせてやる。

と山王丸は加々怒つて居ります所へ、そんな事とは少しも知らないから熊や猪や狼や狸や猿共が平氣でゾロ〳〵歸つて來ますると、山王丸は驅けて行つて第一番に熊の頭を力まかせに撲り付けたから熊は堪らない、目を廻して仕舞つた、さうすると猪や狼等は此方へウロ〳〵彼方へウロ〳〵狼狽て居る、山王丸は大きな聲をして。

『コラ、其方達は逃げると命が無いぞ。

と言はれたので、吃驚して一同其處へ平伏して仕舞つた。

山王丸は此有樣を見まして。

『其方達は何故、此山王丸を困らせやうとかゝつた。

『そんな事は少しも存じません。

と一同は心の中で狐の奴め何にか嘘を言つて山王丸を怒らせて自分ばかり褒められやうと計つたなと思ひましたから猪を始め一同が狐の方を見ますると狐は眞靑に成つてブル〳〵慄へて居ります。

すると山王丸は狐を指して。

『其方達は嘘を言つても駄目だ、この狐が何によ

りの證人であるぞ。

これを聞いて狐は驚いた、若しも山王丸に嘘を言つたのが露れたら、それこそ自分の命が無い、何んでも今の内に逃げるより外に致方がないと其儘何方へか逃げて行つて仕舞いましたので山王丸も始めて狐に偽られたと悟りましたから、今度は又狐の狡猾を憤つて、いよ〳〵狐征伐となりました

さて山王丸は熊、猪、狼を始めと致しまして其他狸、狢、猿、等を牽き連れて山から山、谷から谷の隅々まで殘りなく狐のありかを探しましたが影も形もありません。

さうする内に太陽も西の空へ落ちて夕暮となりましたので、又明日探すとも今日は是れで歸らうと山王丸を始め元來た山道をだん〳〵辿つて來ますると、直ぐ向ふの山の麓に大入道が突立つたまゝ

大きな口をアングリ開いて笑ッて居るのを、負ける嫌いの山王丸が見付けたから堪りません。

『コレ〳〵、向ふに居る怪物は何者だか生捕ッて仕舞え。』と下知をしますと。

直ぐさま熊や猪や狼共はそれ〴〵身仕度をして入道の傍へ近寄りました。

眼は金色の星の如に輝いて、口からは焔の紅の如に燃ゆるばかりの舌を出して、その恐ろしさと言つたら例へやうがありません。所が山王丸を始め一同が縦横無盡に飛び込んで行くと、思ッたよりも弱く忽ち入道は逃げだしました、それ逃がしてはならないと後追ひ驅けて苦もなく藤蔓を以て縛ッて仕舞いました。

さァすると入道は、『降參した許して〳〵。』と泣き聲出して頻りに命乞をします。

山王丸は『コレ其方は怪しからん奴だ何者だか白狀しろ。』

すると入道はブル〳〵戰え乍ら。

『實に申譯が御座いません、私は先刻の狐で御座いますが、假りに入道に化けまして貴方樣方を驚かさうと思ひました所、却ッて生捕にしられ面目次第も御座いません、何卒命ばかりお助け下さい。』これを聞いて、一同寄ッてたかッて入道坊主の衣を脱かせて見ますると果して一疋の狐でしたから皆々果れ切ッて仕舞いました。

山王丸も果れ切ッて、怒ッては見たもの丶致方はなし、殺した所で何の益もなし、寧そ勘恕して遣ッたならば幾ら狡猾い狐でも、何日か役に立つ事もあるだらうと其儘許して遣りました。

すると狐は大層喜んで、軈て山王丸の家臣になッ

て克く忠實を盡しましたとさ。めでたし〳〵

蛙遊び

これは、女子高等師範の附屬幼稚園の子供等がやって居るのを見ましたのですが、次の歌を歌ってやるのです。

お池の蛙は　くわっ〳〵〳〵〳〵〳〵
何というてなく　くわっ〳〵〳〵〳〵〳〵
雨ふれ〳〵とて　くわっ〳〵〳〵〳〵〳〵
ふるまて鳴くのよ　くわっ〳〵〳〵〳〵〳〵

（共益商社幼稚園唱歌）

先ゴ七八人の子供が輪を造ッて丸くなると　二三人の子供が眞中に這入る。週りの輪が池で、中の子供が　蛙なのです。そこで　週りの子供が　右か左かへぐる〳〵回轉りながら『お池の蛙は』と歌ひ出すと　中の子供は　こゞんで跳びながら、『くわっ〳〵〳〵〳〵〳〵』と歌ふ、又週りの子供が『何といふて鳴く』と歌ふと、中で『くわっ〳〵〳〵〳〵〳〵』と歌ふ、此通りにして　上の句を週りで歌へば　下の句を中で歌って　廻ったり跳ねたりするのです。

考へもの

前號の解

(一) 10−9＝1＝日々

(二) くるま

この次は

(一) 十七を三分して魚の名一つ

(二) 十一を二分して魚の名一つ

◉英語の考へもの

(一) 一瞬間には二つ顯はれ、一秒には一つ顯はれ一時間には一つも顯はれない英語の文字は何？

(二) 二綴の英語で、次の綴は始の綴を日本語に譯して發音して居るのは、何？

◉一口話し

田舍者が　馬を引っ張って、品川の方からやって來て東京へ這入りかゝった所で、急に馬の顏に厚布を引っかぶせると、馬は目が見えないから、一歩も進まない、夫を無理に連れ樣として騷いで居ると、巡査さんが來て

巡「コラ〳〵何故馬の顏を隱して居る」？

田舍「へイ〳〵江戸ではハー生馬の眼を拔くといふこツてがすから」

子どもの讀み物

濱子

私の友の一人は此頃こういふ事を語りました。

私は小さい時から物を讀む事が好で、十才頃から新聞の拾ひ讀みをはじめ、高等小學時代には新聞狂雜誌狂など、家内でもあだ名され、新聞雜誌は元より小說でも何でもかでも手當り次第に讀みちらしました。兄が小說好で方々から、小說本を借りて來るものですから、私もよほど澤

山、時には夜がふけても、只一人で讀む位に小說にふけりました。ですから早くから世事人情には割合に詳しかッたのです。又新聞は隅から隅まで、廣告も一字殘さず讀むといふ風でしたから、其年齡としては世才に長じ、世の中の出來事に對して興味を有て居りました。又雜誌は其頃はまだ今のやうに幼年世界とか、少女界とか、適當なものがなくて僅に博文館の「日本の少年」があるばかりでしたが、之を非常に愛讀し、又東洋學藝雜誌とか何とか六かしいものまでもむやみに讀みまして、多方面に種々の事を知りました。

つまり、私の兒童期には、非常に多讀をしたもので、其爲に讀書力は發達し、想像力が强くなり、自分の思想を文字で表はす事が非常に好になりました。けれども、多讀に伴ふ粗讀の弊を受けて、よく考へなければ分らぬやうな處はサッサとぬかし、又は分らぬなりに捨ておきました。たとへば雜誌の中でも、理科に關した處などは面倒くさくて、大抵は讀まぬといふ風に、まるで文學的に傾きまして、此傾は學校の教科書にまで及ぼして居ました。

そうして、一寸讀んで感情を惹き起すやうなもの、强く情を刺戟するやうなものばかりを好みましたから、感情はます〳〵强くなり、年不相應に種々の方面に情を起すやうになり、そうして意志は此强い情に伴ふだけ、又此情を支配するだけに發達する事ができなかッたものですから、だん〳〵情に由て支配される人間になりました。

そうかと思へば、或事柄に對しては思の外、冷淡で、たとへば人の非常に悲むやうな場合にでも、そう悲しくなく、人が大變殘酷に感ずる事をそれほどにも感じなかッたり、つまり或情に對してはそう感じなくなりました。之は全くあまり情を刺戟しすぎた結果、強く感ずるといふ點を通り越してしまッて、却て鈍ッたものであると思ひます。

此私の偏性は幼時からの讀書の材料、讀み方が慥に一原因であると思ひます。

又一人の友は私に語りました。

私は一人前の大人になッて、見界を廣める爲に求めていろ〳〵の書を讀むやうになるまで、學校時代には殆ど教科書以外に何も讀みませんでした。

自家には手近に小說も隨分ありましたが、讀む事が嫌で、手にも觸れず、學校以外では只祖父から教へられる漢書を讀む位の事でした。

此通り寡く讀む人でしたけれども、教科書でも何でも讀むとなれば非常に精讀しました。分らぬなりに捨てゝおくといふやうな事は決してしません。其代りに多種類の物を讀まないから、知識は狹く、世事に疎く、人情を解せず、想像力が乏しく、凡て物を書くといふ事が嫌で、不得手で理窟ッぽイマジメなものをよく考へながら讀む事が好で、凡て心のはたらきが、冷靜で、情に支配されるといふやうな事は少しもなく、頑固と言はれる位に意志の强い人間でした。

右の二人即ち讀書の材料の種類、分量、其讀み方に於て非常に違て居る二人の人の特性がいかにも

違て居るといふ事は注意すべき事ではありませんか。併し此二人の傾は單に讀書の點からばかり來たものではなく、各本來の性質に由る事は無論であります。ところが、此二人が年が長じて讀み物に對する方針が變るに從て、自分の傾の變る事を覺えるといふ事をも各語りて居ましたが、之は讀書といふ事に付て面白い事實であると思ひます。

實に讀書は廣い意味の交際であッて、丁度人と交はるやうなもので、之から受ける感化はなかなか大きなものであります。ところが此有益な讀書でも、其材料の撰擇や、讀み方に由ては却て害を來す事になります。ですから子どもの讀書、之は中々考へるべき問題であります。

絕對的に讀んでわるいものは勿論、子どもにはまだ讀ませてもだめであるとか、讀ませられぬとかいふものは何れも子どもの讀書の材料とする事ができませぬ。又走り讀みに讀み流すとか、拾ひ讀みをするとかいふ習慣は、書は熟讀すべきものといふ方面から考へると避けなければなりませぬ。尤も精讀する力と良習慣を有て居る大人でも、時に臨んである必要の爲に急いで讀むといふ場合はあるにしても、それは變則なのであッて、書は當然熟讀玩味すべきものでありますから、子どものうちから粗末に讀むといふ習慣をつけてはなりませぬ。ところがよく〳〵注意しないと、多讀と粗讀とが大人にも伴ふごとく、子どもでも此弊に陷り易いものです。そうして多く粗末に讀むよりは、寧く精密に讀む方が遙に利益の多い場合が多いのですから、書に讀まれぬやうに、人が

即ち其子どもが眞に書を讀んで自分の知識と同化するやうに其讀んだだけのものは、其子どものものになるやうに注意しなければなりませぬ。

ところが子どもは元來大人ほどのわきまへのないもの、意志の十分發達して居らぬものですから子ども自身が讀み物として、良い材料を常に見出し適當な讀み方をするといふ事は六かしい事であります。もしも放任しておきましたならば、好な種類の物ばかり讀んで、ます〳〵性質知識が傾き、又は粗末な讀み方をしたり、誤解をしたりして居るかも知れません。ですから、家庭（學校でも注意はするでせうが教科書以外の物を讀む時間は多く家庭にあります）では常に子どもが何をどういふ風に讀んで居るかといふ事を注意するのは元より、進で良い材料を供し、有益な讀み方をするやうに導き、子どもが讀書の眞の利益を得、眞の愉快を感じ、將來にまで爲になるやうにする事が必要であると思ひます。自家の兒童、少年、少女がどういふ友とどんなに交はッて居るかといふ事を深く注意する家庭では、其通に讀み物に對しても注意すべき筈であります。

今昔いろは料理

石井泰次郎

（や）

山吹餅の拵方

つきかへしの餅を、砂糖の煮とかしてみつにつめたるにて、柔らかに丸く取上て、玉子を湯煮したるを黄味と白味と分たるにて、黄味のみを馬尾篩にて漉して餅の上にかくべし、漉す時は、餅を馬

尾篩のしたにふきて、上よりかぶせて、馬尾篩のうちの上に黄味をおきて、木杓子にておして漉てかくるなり。

山吹鯛の拵方

さしみにつかふなり、くちなしの蒸汁につけても又雞卵の黄身をぬりて火どりてよし《火どるとはやく事なり》これは仕様よく〳〵ねんを入てこげぬやうに燒くなり、切重にして、さしみ物、平皿また茶碗もの、菓子椀、とりさかなど、いろいろつかひ方あり。

やわらか煮の鱈の拵方

干たる鱈をすこしあぶりて餅米をとぎたる白水にて、干鱈を大鍋に入れて四時間ほど煮て、一夜其なべに留おきて、至極はねともにやわらかになるなり、さてあぢをつけて用ふるなり。

やはらか煮蚫の拵方

蚫に蕎麥粉をかけて、塗物に暫く蓋をして入置て其まゝ大根をおろしたるを澤山にして、水とおろし等分に入て、少しみそを入て、能く煮て《みその分料は水一升に一合にてよし》出すべし

《(ま)》

卷鴨の拵方

鴨をおろして、薄くへぎて、少し庖丁にてたゝきて、隨分たひらかにして、摺身《魚の身をおろして擂盆にてすりたるなり》を右の鳥の身へぬりつけて、しまりよく卷て、紙に包みて、蒸籠に入てむして切形して出すべし。

家庭雑感

その子

▲母親の化粧仕舞ひて後、片附け忘れたる鏡臺の邊りに、頑是なき幼子の這ひ寄りて、臺の上なる剃刀の柄を握り、おはや氷の刃尖を口中に頬張らんとせる危險の刹那を見て、仰天の餘り前後を忘れて側に走せよらんとし若しくは聲を出さば、幼兒は之に驚きて危險を速めん、大に氣を落ち附けて水々したる梨の實を示して、靜に此方を向かさば幼兒は獨り手に危險物を拋げ捨てゝ、梨の方に向ひ來るものなり。

▲持つべからざるもの持つて理も非もなく、離したがらぬ子供に在りても、それを無理にきめつけて引き奪ふよりは、他に子供の心を奪ふべきものを持ち行きて、獨手に氣を此方に向けさする樣すれば譯なく手離すものなり。

▲子供に「これをなせ」と命ずるよりは、これが「出來るか」と持ち懸くべし、人を使ふにも此の筆法が必要なり。大人といふものにも、子供らしき所はあるものなり。

▲先月の中頃、或る場所の父兄懇話會に臨みたりし時、一人の父兄は次の如く語られぬ。

私の家では、子供に決して恐い話はしませなんだ。そらお怪が來るぞとか、狐が人をだますとか、狸にお臍を取らるゝとか、そんな事は一切子供に話すのを嚴禁しました。夫で、今四になる女の子は、夜る夜中でも、闇りで獨り便所に、行きます。だのに、今年十二になる男の子、これは伯母が育てたのですが、これが男だのに、

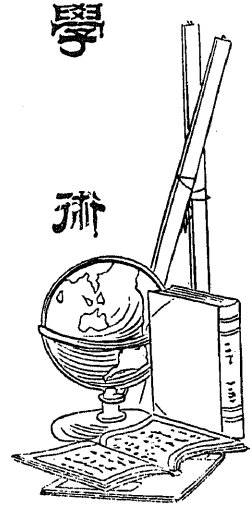
夜獨りで便所に、よう行きません、つまり伯母の育て方なので、夜眠る時、何かといふと、そら鼠に食はれるとか、そら狐につれて行かれるとかいふ話しなどを、いつも〳〵聞かせたからだと存じます。

▲強情で〳〵怒り出さば、誰何といふとも聞き入れず、泣き出さば、何と隙すとも鎮まらぬ子供あり。出來事の起らぬ時、平生機嫌よき機會に、よく〳〵諭し置く事宜しかるべし。

▲子を持たぬ親の『子を持ちたらば　決して〳〵贅澤な衣類など着せまじ、縮緬と唐縮緬と、辨へなき子供に、かゝる衣類の必要さら〳〵なし』とは口癖に言ふ事なるに、さて子を持つたる曉に、其言葉の如くならぬは、全く子の可愛さの、子持ちたる後ならでは、知る事を得ざるによるともいふべきか。

▲廢めたき事は、芝居見に子供を連れ行くこと、音樂會に乳飯子を抱き行く事など。

▲獨身者はひたすら、一身を氣遣ふのみ、一對となりて夫を思ふ優しき心情に已を忘れ、子持ちて更に子を思ふ至純の愛情に已を捧ぐ、されば、自我といふ念は獨身者には、至って狹く一對となり子を持つに至って、已一身より漸次夫子に及ぼして擴がり行くなりと、鹿爪らしく說かれし人ありしが、果して然るものにや。



幼兒の特質

文學士　松本孝次郎

幼兒にはいろ〳〵の特質がある。非常に勇氣のあるもの、臆病なるもの、非常に潔癖なるもの、不潔を厭はぬもの、非常に順序正しきことを好むもの、亂雜を好むもの、あまり從順に過ぐるもの反抗を好むもの眞實を語るを好むもの、虛言をなすを好むもの、あまり殘忍なる傾あるもの、同情に富めるもの、自利的なるもの、他愛的なるもの多辯なるもの、沈默なるもの、公明正大なるを好むもの、密に事を爲す傾あるもの、快活なるもの沈鬱なるもの、美味を好むに過ぐるもの、大食なるもの、疑念深きもの、研究的精神に富めるもの何事にも無頓着なるもの、何事にも氣むづかしきもの、種々の事を問ふを好むもの、想像作用に富むもの、神經質のものなど實に樣々です。

之等の特質には善い側と惡い側と兩方がある。而して遺傳といふこともある事なれば只幼兒のみに責任を負はせることはできない。そこで敎育者保育者は多勢を一時に扱ひながら一人々々を預つて居るやうに考ふることが必要である、而して幼兒に付てよく考ふると其特質は直ぐに分るものである。特質の中には發達させて良いもの、ねさへて良い者、除くべきもの、補ふべきものなどいろ〳〵あり、又保育敎育する者の手にてなほるもの

と、醫者の手を借らねばできぬものとの二種がある、筋肉の不完全、神經系統の發達して居らぬものなどは醫者の手を借るべきもの、又精神的の特質は教育者の手を待つべきものである。

醫の手に任すべきものもいよ〳〵醫の手に任せるまでは教育者の方ですべきものである、だから教育者は生理の方の特質の一斑も知るべきものである。

身体上の特質

之は入學の時又は入園の際に身体檢査をすれば大抵は分ることですが又之より後に發見することもありませう。六才より九才の頃は心臟病に罹りやすく、十三四才の間は神統系統の病に罹りやすく、又遺傳性の病も此頃突然現はるゝことがある。又入學後兒童の境遇、讀む本などに由りて兒童にいろいろの僻がつくものなれば時々身体の檢査する必要がある。

兒童によくあるは疲勞である。何處ともなく見て居る、欠伸をする、下眼瞼を腫らせるなどは疲勞の狀態で、之は遊ばせ過ぎても、働かせ過ぎても起ることで働と休息の度を失した爲である。而して疲勞がつゞくと恢復が六かしく發達に害があるから注意しなければならぬ。疲勞の外の特質は大抵身体檢査の時に見ることができませう。

精神上の特質

之は兒童を永く見て居るほどよく分つて來ることである。而してもしも教育者の知らぬうちに兒童が或行爲を幾度もくり返すと之が僻となり遂には特質となるものです。已に特質になつたのは教育者が早く見付て矯正しなかつたからで其事をす

る度數が多ければ多いほどなほりにくいものである。特質となりしことを發見した頃にはもうおそい。故に教育者は特質を發見するのみならず、特質が作られつゝはあらぬかと絶えず注意し考ふることが必要である。而して惡き特質を發見したならば其特質を作つた原因を除くことが肝要である。それには病人を轉地させると同じやうに其兒に全く今までと違つた境遇を與ふることが必要です。

特質は遊戯の間に發見し又なほすことを得るものです。之は此時は自由であるから各兒は自分の特質を最も多くあらはすのである。故に教育者は此時には十分注意して特質を發見し又之を矯正することを勉むべきである。遊戯はかやうに体操とちがつた有益なところがある。即ち遊戯は只に愉快を與ふるばかりでなく教育的の遊戯は愉快を與へながら教育するのである。体操は体育と訓育の一部分をするものであるが遊戯は愉快にしながら体育もしつけもするものである。即ち幼稚園にては作業にては主に眞面目にせしめ遊戯にては愉快にせしめながら教育の目的を達するのである。遊戯で笑へば心臓がよくはたらき又驅けると筋肉が發達する。又幼兒自身の知らぬ間に何時の間にか惡き性質はなほるのである。今日遊戯に付て一つ誤て居る事がある。一体今日行はれて居る遊戯の内に動作遊戯又は表情遊戯といふものがあつて唱歌の詞の意を表はして動作をするのである。處が此動作をむやみにつけると教育上遊戯の効力を失ふのである。動作が自然的即ち何人が見てもよく分り、又何人でもそういふ風に動作するもので

あるならばよろしい。たとへば來い來いと言ふ時に手まねきをするのは人にも分り又何人でもそういふ風にするから此動作は自然的である。こういふ自然的動作を付したる遊戯は良いのである。處が其外に不自然の動作をまじへるのが隨分多い。たとへば「上を見れば」といふのに目と首を上に向けるのは自然であるが手をも上ぐるのは不自然である。此不自然な動作が多くなると愉快は殺げ記憶するのに骨が折れる。何も唱歌の全体を動作で表はすには及ばない、自然的動作で表はせるだけ表はせばよいわけである。又組を二に分けて一の組は歌ひ一の組は動作をすると歌ふ方は動作を見て樂み、する方は歌と動作の一致を見て樂むから不自然的動作を避けてこういふ風にするのもよろしい。

此頃いろ〳〵遊戯の本ができました佐藤福雄氏のは競走を元とし鈴木米次郎氏のは運動を音樂に合して居る。幼稚園などで初に行進ばかりで面白くないとすれば唱歌の内の動詞の處で表出をさせるがよろしい。たとへば「蓮の花開いた」と言へば開いたと言ふ處にて手を開くがよろしい。一体幼兒は詞を覺ゆるのに名詞が先に覺え動詞をあとで覺ゆるものである。だから動作に由て之を助くるのはよいことである

史傳

節女阿正の傳（承前）

米溪

嘉右衛門急ぎ之を見るに、一は義父母に遺すものなり、内を披けば、云へ。

妾生れて東西も知らぬ間に、蚤く母を亡ひ、父の手鹽に殘りしが、幾程もなく、再び其の喪に遭ひ、未だ物のの理を辨へざるに、天地の間に單獨り、便りなき身となりにしを、撫でづ訓へつ、今日が日迄、長き年月の御養育、御恩の程を思ひ見れば、海山の高さ深さも恩かなる譬へ事なりかし。されば、如何に身は粉に碎きても、此の御恩をこそ酬ゆべき筈なれば、此の度の婚儀に付ても、已に、父母を利し參らするのみならで、諸親一門の利と聞くからに、固より、仰に從ひて、速に、諾ひ奉るべきはゴを、辛きは婦女の上ぞかし。操は命と古くより、敎へられつる事の内、深くも心に浸りけるに、父か臨終の命も輕からず。身は、はや、長二郎に許されつるものを今更之を奈何にして改むべき。近頃聞く所によれば、彼の生業も昔の樣ならで、日增に寂れ行とかや。斯かる折にこそ、人の心の見らるゝなれ。許せし人の艱めるを見なから、身を富めるに寄せ、舊き約束を省みで、獨り榮耀に飽かんとするは、是、妾、父の遺言に違

ひて、長二郎に負き、己か操を賣るなれば、いかで〳〵人と云はれん。さりなから、妾にして、若し、亡父の遺言を空うせず、身の節を全うせんとすれば、勢、義父母の命に負き奉り不孝の子となるべし、事此に至りし上は、如何にするとも、身の立ち場もわらねは最早、唯だ、死より外に分別も無之、膝下に侍りて奉養すべき身の、先き立ち奉る不孝の罪は、妾か胸中に酌みて、許し給はらんことを祈り奉る云々。

他は長二郎に遺せしもの。云ふ、

妾、身を郎君に許せるは、亡父の命、今更言ふに及はさることなるも、義理ある父母の勸めとて、近頃、頻りに勝浦に適くことを強ひられ、結納を取り交はすも、最早、目前に迫

れるに、妾、心も心ならず、幸に心易き隣家の翁を語らひて、徐ろに、事の理非を說かせしに、毫も其の事の聽かれさるのみならで、托せし人さへ、翻りて、今は妾に心を改めんことを勸むるに至り、誰一人として、郎君に適くことを贊くる人も無きことなれば、妾一入、郎君の御上痛はしく、日夜悲みに閉されて徒らに慘ましさと、身の遣る瀨なさの涙に咽ぶのみ。あはれ義父母の命に任せんか、饒へ、妾一人遂に不義の婚をなし、身は錦繡に纏はれて、口肥甘に餘かしむるも、何に面目ありて、世の人に見へん。之、到底妾の堪ゆる能はさる所、義父妾の固く肯せざるを見て或は、妾か郎君と殷勤を通ぜるものと謂へる如し、之れ誠に止むを得ざる疑の樣なるも、

妾か潔白の情操は、郎君の克く知らるる所。許嫁の義誠に重くして、亡父に地下に見へん時、少しも愧づる所なからんと思ふのみなるを、疑の雲晴らすに由なく、節を定らんと欲して、却りて寃抂に苦む、此の程よりは又、妾か身を看守る人さへ添ひて、日夜の隙もあらぬ内に、獨り愁心を懷ひて、彼方の空を眺め、此方の上を想ひ惱めば、いとゞさへ結ぼる丶胸の鎖し、到底解くべき樣もなし。彼を思ひ、之を念ふにつけても、万愁心に纏ひて身を措くに所もなし。唯、一死、聊か自から潔うして、妾か心の汚れなきを明かにすれば、縱令、現世緣薄く、獨り郎君に先たち參らするも、祈るらくは來世は共に、生を佛國に托せんことを許し給はれかし。亂るる心に亂る丶筆冀くは察し玉ひてよ。云々。

實に享和辛酉十一月の事なり。嘉右衛門獨り憮然たりしが、万助亦至り、其の尸を見、窃に罵りて曰ふ、執拗の女子なるかな。自から罪業を造りぬ。いかでか、成佛せんやと。遂に、善次等と相謀り、狂疾を以て聞せしめ、賄を郡宰に行ひしかは、事、寖、問はざるを得たりと雖も、物論は囂々たり。然れとも又敢て上聞するものもなさなり。其後十八年、藩儒竹田嵒甫、長韻を賦し、題に命するに節女詞を以てし、悉く其の事柄を叙したるに、藩侯此の詩を閲し給ひて、心に之を異み因て、密に中外に詢はれぬ。然るに、侯の生母、亦賢にして惠深かりしか、偶、侍する所の小婢は赤間のものなりしかば、呼ひて之を近け、問て實を得しかば、盡く之を侯に語られさ。是に於て侯

乃ち吏を遣はし、廉問し、遂に兩村長の職を褫ひ、當時の郡宰以下を追咎し、黜罰差あり。節女の家に白金を賜ひて、存卹せしめ、以て之を旌せられしと云ふ。

米溪子曰く、正女は一微賤の女子、別に教養の素あるにあらず、而して、其の貞烈、人をして襟を正さしむるものあり。聞く、泰西の風、死を以て罪惡となすとかや。處するに道あるに拘はらず、敢て身を傷ふは、固より論ずる所にあらずと雖とも、欲する所生より甚しきものありとすれば、正女の如きは、蓋し其の欲する所を得たるに庶幾からんか、國各風あり、俗あり。國風嚴として、以て萬國の間に卓然たるを得んとす。徒らに、之を顧みずして、彼に馳す、本を忘るゝの誚を免かれざらんか。今や朝野、女子、道を學ぶものに付て、論する所囂々たり、之れ果して、國家の爲に喜ぶべき現象なるか、女學校教育は、歐米に於ては良妻の資格たり、我が國に於ては、不良妻の資格なり、と叫ばしむるに至れるは、仰も、其の貞婉の德、仁厚の風、婦たり、母たるの素を養ふ所以に於て至らざるものあるによらずとせんや。正女の如きは、封建の余風に化して、遂に凜烈、節に死するもの、固より、今日の倫道に於て律すべからざるものありと雖とも、抑も亦我が國風の存する所、今日の弊に鑑みて、又他山の石たらずんばあらざるなり。

（完）

黑澤登幾子（承前）

下村三四吉

登幾子が京都に上りて藩主の寃を訴へんとの決

心は、いとも固くして動かすべからざるほどなりしも、また母のおもはくは如何ならんと案じわづらへりしに、母はその忠節と熱心とに感じて却てその事をすゝめたるは、前回に述べたるが如し。登幾子は、勇み立ちて出發しぬ。母はよろこびてこれを送りぬ。されど、前途は測り知るべからず母子の再會は或は期し難かるべし、固より覺悟せるところとはいへ、その間また暗涙を呑むの悲みなからんや。想ふてここに到れば、當時悲壯の狀景眼前に髣髴として、感慨胸にせまるの思ひあり。

時はしも安政六年の二月なり。嚴霜雪の如き晨、先づ鞋痕を印して、登幾女は、鍋高野村を出でぬ。常にても婦人の旅行は容易ならざるに、まして當時は幕府の偵察甚だ嚴密なれば、忽ち發見捕縛せられん慮りあるを以て、笈を負ひ笠を蒙ふり。廻國巡禮の姿にやつせり、寒威何かあらん、嶮途恐るゝに足らず、恐るゝところは京都に到着せざる間に幕夫の妨碍にあうて素志の水泡に歸せんこと是なり。

かゝれば、江戸に出でゝ東海道を上るべき順路に就かずして、なるべく注目を避けんために、中山道を取りぬ。先づ笠間より下野の小山に出で、佐野桐生等を過ぎ、草津を經て信濃善光寺に詣で、また戸隱山に上り、その戸隱權現に一首の歌を上れり。

きみのため思ふねがひを雲井まで
　みちびきたまへとがくしのかみ

陽氣の發するところ金石も亦透る。登幾女の至誠には神明も亦感格してその祈願を受納せりしなら

ん。

それより、伊奈道によりて本街道に出で、美濃近江を經過して三月廿五日に恙なく京に入りけり。守山にては關吏に誰何せられしかど、巧に之を欺きて危難を免れしといふ。途中の困難はもとより一二には止まらず、今はただ簡單に叙し去りたれど、餘は讀者の想察にまかせん。

長途の困難は幸に果てたりしも、訴寃の目的を達すべき困難は更に目前に迫れり。されど、思慮に富み加るに誠意熱心なる登幾女は、自已の修養深き歌學に因りて直にその便宜を見出だしぬ。そは外ならず。入京後一日を隔て、北野神社に參拜し、同社の慶圓坊の紹介にて、前大納言東坊城聰長卿の門に入りて和歌の修業を請へることとれなり。されど、當時卿は閉居中なりしかば、その

家臣座田綱貞に就きて教を受けたり。

かくて日を經るまゝに、登幾女は綱貞の人となりを知りしかば、一日時事の物語りの序でに、かねてつくれる長歌を出して見せけるに、綱貞も大にその篤志と詞藻とを感賞し、登幾女が請へるまゝに、これを聰長卿に達し、遂には卿より進めまゐらせて、叡覽を辱ふするに至れりといふ。あゝ「君のため思ふねがひ」は「雲井まで」とどきたり。登幾女のよろこび察するに餘りあり。登幾女の詠進せる歌は

奉献　天皇陛下歌并反歌

ちはやふる　神代のむかし　神々の　しづめたまひし　秋津島　げにもたふとき　日本の清きひかりは　古へも　今も千とせの　末までも　かはらぬ君が　御代なるを　かくと

はいざや　白浪のよせくるごとに　異國の
ことうきふねの　えみしらが　あらぬ願事
つとつとに　うけ引く國の　あやまちは　井
伊てふ人の　こころから　御國のおもの　は
みながら　まめまめしくも　おもはえず　あ
やなくまどふ　ぬば玉の　心のやみの　くら
がりし　くろきまがねを　かたらひて　いさ
をしあれど　咎のなき　かしこき君を　押こ
めて　黃金のいろを　山吹の　花ちるごとく
　まきちらし　雲の上をも　恐れなき　たく
みのはどぞ　あさましき　あさきたくみも
おのづから　うき世の人の言の葉に　かかる
惡事を　傳へきく　身は下ながら　天照す
神の御末を　くみてしる　いさをもたかき
藤原の　流れのすゑの　われなれば　聞きす

てならず　年たけて　五十の四つに　なりぬ
れど　七十路三の　母そばの　老の齡ひを
みまはしと　教の道を　わざとして　細きけ
むりは　たて居りて　朝な夕なに　つかへし
も　事をつはらに　わたらひて　しばしのい
とま　乞ひければ　ともにこゝろを　添へら
れて　御國のために　時をえば　早とく行け
と　老らくの　言葉をすぐに　ちから草　露
をふくみし　あさぼらけ　日も立出づる　衣
手の　ひたちを出でゝ　しきしまの　道ある
御代を　したひつゝ　杖をちからの　旅の空
　たどるも君が　御代のため　おもひつゝけ
し　老が身の　矢たけ心は　春の野を　ゆく
もかへるも梓弓　はるけき道を　さゝがにの
いとも　たゆまず　引のばし　雲の上まで

かけはしを　わたるおもひは　天さかる　ひなに生れし　塵の身の　ちりつもるてふ　山の井の　深きこゝろの　みなもとは　流れて清き玉水の　中にすみぬる　魚こゝろ　拙き身をも　わすれつゝ　御國のためと　朝夕に千々にこころは　くだけども　只ひとすぢに　引水の　せみの小川に　みそぎして　はるゝきぬる　たびごろも　あかつきながら　うぐひすの　初音のこゑの　ことふきや野末に匂ふ　梅が香を　天津空まで　つたへあげ　恐れ多くも　久方の　雲井の　庭にぬかづきて　まをす言葉を　守るなり

反歌

よろづ代をてらす光のますかゞみさやかにうつせ賤がまごころ。

衣手のひたちを出てゝしきしまの　道ある御代をたつねてぞとふ。

たまぼこの道はあれてもすゝみゆくやまとこゝろのこまはたゆまじ。

梓弓はるけきみちをさゝがにのいとものたゆまず空のうへまで。

きよみがたきよらにすめる有明の月にくらべんやまとこゝろを。

（つゞく）

文苑

旅のすさび

鷺水

都をたちいでゝ那須野
が原をすぎける
ふしなへて世をうき旅とよの人の
想ひなすのか原をすぎけり
松島につきける頃
空かきくもり雨さへ
しきりなり
はれやらぬ雲の絶間をまつ嶋や
嶋よりさきにしまはありけり
猶ふなし處にて
藻鹽やく海士の小舟の遠く近く
漕ぎゆくかたに嶋のかずゝ

七戸といへる處より
一里ばかりゆきて
とある農家に宿り
ける夜よめる
旅枕夜半にも鐘のきこゆなり
人里遠き草のいほりに
青森より都へ歸る日を
知らせける文の内に
つみためし心のはなのひもとかは
われはたいかに樂しかるら舞

親しき友に

木の下　いつ子

君よ泡さく紫の
神の酒甕を身にしめて
あまき天甕の花の香に
とこ世の春を求めずや
見よひんかしの空高く
とこ笑むほしの影若み

我が世の幸と耳うてば
天のさゝやき靜なるか那

暮秋

東　くめ子

人まつ虫の音　いつしかたえはて
招きし尾花の　袖さへ破れぬ
暮れ行く秋を　とゞめんすべさへ
しら露ふきそふ　庭の面さびしや

賤の女

敏子

いつても同し　文明の
光くまなき　御世なれは
都に遠く　へだつとも
まなぶに難き　事やある
何かなげかん　山青く
水清らけき　海原の

岩にくだくる　波のはな
ちりては結ふ　月かけの
あかぬながめを　朝夕に
友とたのみて　むらきもの
心の限り　學ばゞや
心のかぎり　學ばゞや

歌の曲

つねを

うつり行く世の　ならはせか
素樸のこころ　おのづから
清きおもひに　慰藉の
それもしばしの　夢のまや

かすかに響く　あかときの
天使のこと葉に　目さむれば
つれなき緣りの　いく年か
過ぎて果敢なし　人の夢

優しくかしてき　　まごころの
あつきなさけの　　永刼と
同情の涙　　あふれては
袖のおもりし　　こともありしか

月に向ひて　　はなに醉ふ
虫鳥の音に　　あこがれて
世の幸ち人の　　さはげども
我れにはつらき　　歌の曲

勇ましき若武者

澪　譯

一、誰か敢て此深淵に潜り入る者ぞ、朕は金盃を投げ捨てたり、黑き淵は早やそを鵜呑にしたり誰か朕に彼盃を致すものぞ、あらば盃は以て其者に與へむ。

二、王はかく語りも終へず果しなき大海に突出し峻峭崎嶇たる絶壁の頂より、其金盃を渦まける洪濤の中に投げこみて、再び問ひけらく、……誰か敢て此深淵に躍り入る者ぞ。

三、王の前後左右、騎士若武者の面々、聞き終りて森として水をうつたる如く、唯暴れにあれし大海を瞰し居るものゝみ、誰あつて其任に當らむとする者はあらざりき。王は三たび問ひ給ひぬ、一人奮起するものもなきか、と。

四、されど並み居る人々依然として隻語を發する者もなし、此躊躇せる若武者の一群の中、思ひきや靜々と大膽に歩み出でたる一人の年少武者のあらむとは、彼は早や帶を解き上衣を脱ぎ去りぬ、山なす扈從の面々さては貴女貴婦人など、一切の驚奇の視線は、此花やかなる若武者の上に注がれぬ。

五、斯くて此年少は絶壁の傾斜に歩み出でて、淵を見下しぬ、怒濤は渦を打込みつ、咆り狂ひて渦卷は又其怒濤を捲き返し、鳴る神の音もとゞろに幽暗の淵に泡だちながら衝突しつゝあり。

六、動揺し、沸騰し、咆哮し、飈然として水火の相交るが如く、濕れる泡沫は天に迸發し、大浪の上に又大浪をうちかけて、海より海のわく如く果しもわかず見えにける。

七、されども暴勢は遂に稍鎮まりて、白泡消えて、底黑く、開ける裂目は奈落の底に底ひも知れず裂け入りて、渦の漏斗のその中に碎けし波濤の滔々とすぐくが如く吸込まるゝを認めたり。

八、其時年少は眼を閉ぢて其身を神に投げ出し碎けし波濤の盛り返す此時早く身を躍らしぬ、戰慄の叫びは四邊にすさまじく響き渡りぬ、渦卷は早や彼の年少を捲き込みて、跡白波と影だも見せず、神秘に其口を閉ぢたりき。

九、深淵の表面は稍靜まりて、水底よりグルグルと怪しき響のみして、ブル〳〵と泡さへ起ちぬ、並み居る面々、口より口に震へながらに……惜しき若者よ、無事なれかしと顏見合すに、淵にはグル〳〵ゴロ〳〵と續き續きて唸れる如き響さへ聞えたり、げに氣づかはしくも恐しげなる時の間も尙如何あらむと心待ちにぞ待たれける。

十、よしや王冠を投げ込みて、誰か我冠を拾ひ來るものぞ、拾ひ來りし者は冠して以て王たるべしと宣言せらるとも、此報酬を希ふ者、抑も幾人ぞや、怒號せる深淵の底に何物の潛匿せるか、之を見し人の生きて歸りて語りたる者一人もあらざるに非ずや。

十一、誠に數多の船舶も急流に捉られて、忽ち深淵に吸込まれ、何物をも嚥み込みし此墓場より、唯龍骨と帆柱とのみ破碎せられながら拗れて突出でつ、流の聲の段一段と清冷となるまゝに、人の耳には層一層と泡だちて聞ゆるに非ずや。

十二、かくて今しも水火相戰ふ如く、掀蕩し、沸騰し、泡起し、颼々として泡沫は天に飛び、限りもなく波の上に波をうちかけ、遠雷の響の如く、幽玄なる層樓に哮へながら顛墜しつゝあるなり。

十三、見よ、其漲れる層樓より豫察すべき白さ何物かが高まるを、見る〳〵片腕と雫に光れる頸とは裸出したり、滿身の精力を鼓して奮勵せる筋を揮つて泳げるなり、若武者は泳ぎ出でしなり、彼は右手に金盃を高くさゝげて、喜ばしげに之を振りつゝあるなりき。

十四、斯くて長き深呼吸の後、やう〳〵彼は娑婆の光明に再會したり、列座の人々異口同音に雀躍しながら叫びたり、生きたり、出でたり、呑まれざりき、墓場より……渦まける水の穴より唯大膽が彼生きたる精神を助け出したるなりと。

十五、若武者は上り來りぬ、破るゝが如き喝采は彼を取圍みたり、取圍まれて彼は王の闕下に伏して盃を持して跪いて之を王に捧げぬ、王は唯徐に其鐘愛し給へる年若き花の如き皇女を顧みたまへば、皇女は命に應じて鮮麗なる醇酒をなみ〳〵と溢るるまでに若武者のさゝげし其の盃に充したり。

十六、大王萬歳といとふでそかにはぎ奉りて自らも其身の恙なかりしを心に祝しぬ、誰か斯かる燦爛たる薔薇の光の如き境遇に呼吸する者ぞ、さ

れど斯かる境遇の下こそ戰慄すべきもの潛めるなれ、誠に人間は神怪を窮むべきものに非ず、決して決して、神怪が暗黑と怪怖とを以て親切に隱蔽したるものを窺はむとすべきものに非ず。

十七、電光の如くに引込まれ、己は岩石の堅坑より激流の泉に向ひて暴くすごかれながら顚墜し茲に縱橫二重の暴怒せる勢力に卷き込まれ、獨樂の如くに此身を眼くるめくまでに轉回せしめられたれど、何とも抵抗するを叶はざりし程にて候ひき。

十八、最も戰慄すべき危急に際して我知らず念じたりし神は、淵の底より突き出でたる岩の暗礁を默示し給ひたれば、己は神速に之に取付きて、やう〳〵虎口を逃れたり、而かも又其處なる尖れる珊瑚樹に金盃の懸り居たりしぞ、げに幸の極みなれ、否ずば盃は底ひなく落ち行きしならむを。

十九、己が取すがりたる暗礁の下に、尙幾千尺となく黑紫の幽暗なるのみ、耳欹つれば永久に眠れる如く、身震ひしながら瞰せば鯢の如く龍の如く、恐るべき地獄の底に激動しつゝあるものも候ひき。

廿、其處には、刺鋭き鰊魚、鐵槌の恐ろしく出來損ねたる如き大口魚など恐しくも混沌の中に凄愴なる堆積となりて眞黑に動き、海の狼とも喩ふべき身の毛もよだつ鮫など獰猛なる牙を鳴らして脅迫致し居候ひき。

廿一、己は其處に懸りて、凄絕の怪物の側に、夢にも人語の響だにあらぬ愴絕の寂莫の中に、唯一人水底深く人の助けより遠く離れし我身の上に想至りし其際は、流石に恐しなどいふばかりなく

候ひき。

廿二、さても己は匍匐しながら、そを考へて、百の關節一時におのゝきて、今にも呑みつくされん心地して、恐れの狂ひに思はずも、手放したるは彼珊瑚のからまりたる枝、轟々と渦は忽ち己を攫み去りたり、されどそは己には恙もなさず、却て己を上の方へと引放したるにて候。

廿三、王はいたく驚かれたる面持にて、更にいひ給ふ、其金盃は汝に與へん、汝若更に一度探險して大洋中の深底の消息を齎さば、此寶石を以て飾りたる指環を汝の物とせむと。

廿四、さすがに優しきは女心なる哉、皇女はそを聽き終りて、愛らしく口ごもりながら懇願したまひける、やよ父上よ、そは餘りにつれなき御遊興に候はずや、彼若武者は既に何人にも能はぬ役目を遂げ果て候ひしに、御所望の尚飽かで思召さば、あはれ彼若者は恐らくは他の騎士の面々より嫉を受くるをも候はむと。

廿五、此時早く彼時遲く、王は盃を手にとりて渦卷の中に投け込みて、いひ給ふ、汝若し彼盃を再び朕に致さば、汝は朕の拔群の騎士たるべく、且つ今汝の爲に柔さしき同情を以て懇願せし我此愛娘を汝の室として行末永く汝に托せむと。

廿六、神來の勢力は彼若武者の精神を捉へたり、そは彼の眼に勇ましく輝きて現れつ、彼は麗はしき花顏を見るとはなし見返りて顏赧らめぬ、皇女は色蒼ざめて見送りつさしうつむきぬ、此時既に若武者は、此高貴なる榮譽を夢みつゝ、生命と努力とを睹して、黑淵めがけて眞逆樣に跳り込みけり。

廿七、眞に人々は波濤の洶湧するを聽きたりき實にその洶湧のはねかへすをも聞きたりき、雷の如き響は其洶湧を報告したるなりき、其處に愛ぐるしき眼もて、身をかゞめて一心不亂に氣づかはしげに瞰下しつゝあるは、皇女なりき、返り來れり、水は、凡て湧き返り來れり、誠に水は漂々として下りつ又沙々として高まり來りつれど、而かも、彼若武者をば再び捧げ來らざりしなり。

この一篇先月日本赤十字社總會に出張の節式の始を待つ間に鉛筆もて、手帳に起草したるもの、其儘に打ち捨てんもさすがに惜しき心地のせらるゝまゝ寫し取りて御覽に入れ候

相賀調雨

袴の賛

袴よ袴、汝三尺未滿の身を以て、日本赤十字社の總會に列り、我國固有の禮服を代表して、燕尾服フロックコートに敢て遜色無きは、予の敬服する所なり、しかのみならず年立かへるわしたの廻禮にも汝が隨伴せざれば吉例を欠き、太郎が五歳の祝ひも汝の名を冐さねば、千歳飴も配り榮えせず、鶴が岡の社頭に源廷尉を追慕し、右幕下の權威に媚ざりしは靜御前が節操の舞ひ袴、少しく裾は截り飛ばされても、供不戴天の仇を討とめしは、無三四が至孝の曠れ袴、年男の袴には鬼も恐れてはしり、五人囃子の袴揃ひは雛檀に笑顔を競ふ、春の日の永きも鞠袴には暮るを惜み、番袴はかぬ日は却て内職の楊枝に鬧がし、露にもめげぬは駕籠脇の股立ち、襞襞の正しきは裁縫師の敏腕、花聟へ贈る結納は必袴地を筆の首めとし、年の尾の進物には牛蒡にも袴を着せたり、袴よ袴笑ふ勿れ汝が片々の穴に兩脚を突き込み施主の列にふく

れしはあに弟子の滑稽、袴よ袴怪む勿れ汝が股に兎家鶏をも忍ばせて、觀客の眼をくらませしは蝶齋が手練のはや業、團州の勸進帳の袴は容堂公の拜領を誇り、足袋福草履に袴の態度嚴そかなるは有繋に庄之助の行司振りなり、毛見の出迎ひには貪欲名主も袴の腰を低くし、上野袴腰のくうやは珍菓の調製に名高し、長岡商店の仕入袴は販路頗る廣く、手首の色には似もやらで紺屋の袴はいつも白し、平袴もまち高に改造されて廢物利用を說き、德利も袴の保護にあつかりて轉倒のおそれ無きを得たり、袴よ袴枚擧にいとまなき、汝が一門類屬、箸の袴灰吹の袴等に至る迄、一として世にもてはやされぬは無きが中に、陶淵明の袍袴を厭ひしは東籬に菊を愛するのみやび心と見て恕す可くもあれど、獨りゆるし難きは、海老茶袴の

自墮落なる綻ひにそわる
枯てまで香をたもちけり藤ばかま

武士の
矢なみつくらふ
籠手の上に
あられたばしる
那須の篠原

源實朝

說林

明治三十五年を送る

日を餘ますこと三旬を出でずして、明治三拾五年は既に暮れんとす、去年の末相互に多福多幸を祝して迎へし本年は、打ち見たる所、意外にも總べての方面に於て多事なりし年よ。歳の始に於ける痛ましかりし北奥の凍死事件を抑々の發端として、中頃に起りし九洲の、さては近日に終はりし附近の惡疫、何程か人の膽を寒うしたりけん。而して其間曰く海嘯、曰く颶風、曰く噴火、頻々として交々臻り、人をして左盼右顧、殆んど寧日なからしめぬ。而も是れ何れも皆天災地變、人力の以て如何とも爲すべからざるもの、悲しむべしといへども、未だ以て恨むる所なさなり。

而して彼の所謂女學生墜落問題の提起の如き、等しく社會人心に刺戟を與へたるもの、中、一見大に悲しむべくして又恨むべきに似たり。何となれば一面に於ては幾多純潔なる女學生をして、最も忌むべき寃罪を被らしめ、一面に於ては幾多眞率なる父兄をして危懼の念を抱かしめ、かくて折角勃興の兆を顯はし來りたる女學の進路に向つていさゝか妨害を與へたるを以てなり。然れども、是とても見樣によりては、反つて悲しむべからず、恨むべからざるのみならず、女子教育進歩の趨勢として、社會が女子教育に向つての期望を漸く大

にしたるものとして、寧ろ大に祝福せざるべからざるものあるなり。何となれば、所謂女學生の墜落せりといふもの、誠に千萬人中二三に過ぎず。而して此の如きは、何れの年に於ても斷じて之なきを保せず、而も本年に至つて千萬人中二三の墮落生あるの故を以て、即ち囂々として並び起つて之を攻擊す。其攻擊する所以のものは、實に千萬人の悉く純潔ならん事の期望を女學生に囑するに至りたるもの即ち女學生の社會に對する責任の漸く重大となりしと共に、其眞價の漸く社會に認識せらるゝに至りしものとして、宜しく大に祝すべく又賀すべきの至りにあらずとせんや。

其の他吾人の最も希望に堪えざりし母の會の如き、動物虐待防止會の如き、工女保護會の如き、有益なる會合の此處彼處に設立せらるゝ者漸く多く而して近來又、免役女囚保護會と稱するもの、一部の貴婦人に依りて組織せられんとすといふ。

要するに、明治三十五年は、比較的多事なるが如き年なりしといへども、其精神的道德的進路に於ては頗る其歩を進めたりといはざるべからず。吾人は今や此年に告別せんとするに當りて、此年の吾人に與へたる之等の祝賀すべき賜物に向つて大に感謝の意を表せざるを得ず。

こゝに明治三十五年を送りて、更に來るべき年の多幸ならんことを祈る。（牧羊）

本邦古代保育法の一斑（承前）

下村三四吉

さて、また、子どもに名を付けることに就いて、古代には、その母たるものが、つけたといふ一種

の習慣がありました。これは、『日本書記』神代卷に擧げてある一書中に、鸕鷀草葺不合尊御降誕の事を記して、天孫が其節同皇子の御生母たる豐玉姫に「兒名何稱而當可乎」と御尋ねなされしところ、豐玉姫は「宜レ號二彦波瀲武鸕鷀草葺不合尊一」と御答へなされたことを記してありますのでも、わかりますが、これのみにては、たゞここの特別の場合に限られたこととも申されますが、なほ外のたしかな證據があります。それは古事記垂仁天皇の條に、皇后狹穗姫が御兄の狹穗彦と共に稻城にたてこもつて、焚死したまはんとせられし時、天皇より皇名に御尋ね遊ばされた御ことばの中に「凡子名必母名」といふことがありますが、宣長翁はこれを「子の名は必ず母なもつくる」と訓んでおられる。即ち子の名は必ず母親がつけるといふので、前に擧げました例と合せて考へれば、極古い時分からこの習慣のあつたといふことが分るとおもひます。

右の通りに古代には、子の名をその母親がつけることになつて居りましたが、その母たるものは、色々の事情に因んで名を付けたことは申すまでもありませんが、前に申しましたその母の居住せられた地名から取られたものの少なくないのも、一つはかかる事柄から出てゐると見てもよろしからう。前に擧げた建埴安彦の御母は埴安姫、狹穗彦の御母は狹穗の大闇見戸賣、舒明天皇の御子蚊屋皇子の御母は吉備國蚊屋の采女、また天智天皇の御子伊賀皇子は伊賀の采女にて、埴安、狹穗、蚊屋及び伊賀は何れも地名なのです。なほ地名に限らず、他の名でも母が子に名をつける場合に己の

名の全部或は一部を取つてつけた場合は少からぬことと思はれます。

母たるものが子に名をつけ、またその場合に己の氏或は名を取る習慣が古代から在つた關係より皇室にては、後には乳母の名をその乳養せられたまふ御子につけさせられることが始まりました。平城天皇の御名の小殿及び嵯峨天皇の御名の神野は何れも乳母の氏から取られた名である。『文德實錄』と申す文德天皇の御時代の事を書いた歷史の中に「先朝之制每二皇子生一以二乳母之姓一爲二之名一焉」とありますが、もとより先朝とありまして、これより以前からあつた風たることは明かで、その始まりは何時頃からか分りませんが、この習慣はもと實母の名を取られた遺風であらうと考へます。

名のことについてはなほ申したいこともありますけれど、あまり枝葉に亘りますから、この位に止め、また本題の話もこれにておしまいに致します。つまらぬことながら、何か御參考になることでありましたら、仕合せと存じます。（完結）

Wer im Sommer nicht arbeitet, muss
im Winter
Hunger leiden.

盛夏に當りて、勤勉ならざれば
殿冬飢餓の苦を免るゝ能はず

東京市養育院感化部

ひさ子

私は前々號に窮兒の惡くなる有樣を記しまして浮浪少年の生ひ立ち、種類、變化などを述べましたが、實に浮浪といふことは犯罪の第一着歩で正しい職業に由て自分で生活する力をまだ有たぬ子供が、よるべもなく此世の荒浪にたゞよひました結果、彼等の多くは生活の爲に惡事をも敢てするといふ惡鍛練をうけて、惡に強い犯罪者として世の中に現出します。哀れむべく悲むべく恐るべき

事ではありませんか。もしも感化事業が廣く行はれまして、惡くなりそうな者、又は已に惡化した浮浪少年を悉く收容して正しく自活する方法を敎へ、良い方に導きましたならば、どんなにか種々の方面から國家の爲、人の爲になるでありませうか。感化事業は誠に根本的の仕事で、純然たる敎育事業であります。

東京市養育院には感化部の設がありまして其入院規則中に左の箇條があります。

一滿八才以下十六才未滿ニシテ扶養義務者ナキ惡化ノ虞アルモノ

二滿八才以上十六才未滿ニシテ放逸又ハ不良ノ行爲アリテ扶養義務者無資力ノ爲之ヲ矯正スルコト能ハサルモノ

右何れも東京市在住の者に限ります。

明治二十七年以來、此院では浮浪少年惡化の事情を取調べられました結果、感化部設立の議が生じ、三十年英照皇太后崩御の砌の恩賜金を感化部基金とすることに定まり、更に廣く寄附金を募集して遂に三十三年創設の運になり、同年七月新築の寄宿舍で開始の式を擧げたので、其建物は養育院內小學校の廊下つゞきにありますが、私は此室に入りませした時に、一昨年來此處で幾多の罪惡（社會全体から言ふと實に一小部分）は未然に防がれ、末恐ろしい惡少年は矯正されて居るのであると思ひますと同時に、いかにもこういふ事業が世に必要であるといふことを深く感じました。今此部には現に四十五人の少年が收容されて居りますが。（內五人は女子にて普通部の幼女室に居ります）創設以來收容された者百八人の內、掏摸窃盜の犯罪ある者七十一人、此內處刑を受けた者三十二人との話であります。皆十六才以下の少年であつてこうであります。之等の少年、もしも他の良い導を得ませんでしたならば今頃はなほ進んだ惡人になつて居るでありませう。

此部に付て同院の或方が語られました事を左に少し御とりつぎをいたしませう。

○惡少年が入院前浮浪するに至つた直接の原因は樣々であるけれども、彼等の遺傳（多くは後天的）家庭、境遇、社會風潮の變遷などは最も主な原因である。

○文明に伴ふ一の通弊ともいふべきは、都會の膨脹と共に世人の都會生活を喜ぶ者多くなり、殊に少壯の輩は之といふあてもなく都會へ都會へと向ひ、田舍の良い生活を捨て、生存競爭の最も劇し

い、誘惑の甚だ多い都會生活に轉ずる、そうして遂には其身をやぶり其家をやぶりて其子弟を誤らせる。本部に收容した浮浪少年を府縣別にすると二府二十二縣の多きに別たれる。して見ると浮浪少年もしくは其父兄が二府二十二縣から東京市に入り來り、都會生活に失敗して遂に浮浪の境涯に墮落するに至つたといふことは疑もない事實である。

○家庭の不幸といふことは實に悲むべきことである。本部が開設以來收容した少年百八人の內、完全に父母のある者は僅に二十七人である。彼等の多くは父母もしくは片親を失ひ、又は失つたと同樣の事情の下にある。之で父母又は片親のないといふことが彼等小年の生ひ立ちにいかに大打擊を與へるかといふことが分る。又父母の離緣又は逃亡に由りて孤兒同樣の境涯にある者となると、人生墮落の一着步已にこゝにあると言はねばならぬ。

○浮浪少年は必しも無教育な者ではない。彼等の多數は多少の學校教育を受けたもので、全く文字を知らぬ者は收容者百八人の中僅に十九人あるのみである。そこで彼等が生來浮浪の境遇にあつたのではないといふ事が分る。

○父兄の職業は種々雜多であるが、要するに現今の社會で下等の生活をする者が多い。

○浮浪の近因是亦種々であるが、多くは何の思慮もなく、我儘に家出したのか、父母繼父母又は雇主の虐待に堪へず逃走したものが多いやうである。

○心意上の傾向及性癖をいふと、浮浪少年は概し

て自利心強く、虛欺に巧に、理性乏しく、感情常に動搖し、意志薄弱で、注意力乏しく、物事に當りて忍耐する能はず、猜疑の念に滿ちて居る。要するに道德的欠損が甚だ多い。

○身躰の發育から言つても彼等は多くの欠點を有て居る、頭部に傷のあるもの、手又は指の異狀なもの、腫物の多いもの、身躰の矮小なもの、胸圍の小なものが割合に多い。

○感化の方法は種々であるが、感化上の一大主力は至誠と仁愛である。此二は言はず語らずの間に兒童の心裡に徹り、彼等の心情を動かす。こうなるといかに猜疑心ある者も遂には教育者保姆を信ずる。そこで眞に教育の端緒が開ける。

○たれを教育するにもまづ其人を研究しなければならぬが、殊に惡少年は其惡化した原因　境遇其他に付て十分取調べ考へて後、之に適當な教育法を講じなければならぬ。

○彼等の多くは己に種々の苦痛と困難とを嘗めて來たもので、普通少年のやうに罰といふものを恐れない。即ち罰は彼等が屢嘗めて遂に懲りなかつたものである。それで本部は鞭ちて追はんよりも、導きて進めるといふ考から、罰はなるべく避けて賞の方を多く用ふる事にして居る。

○少年の性情思想は變化しやすいものであるが、近來本部に居る少年の心中に一點の希望が生じて來た。此希望の生ずると共に、彼等は前途に付て思慮するやうになり、手工に關する興味を起し、進で灑掃をなし、所有品を整理し、讀書の興味著しく增進し、自利心は大に制御せられて來た。そうして虛欺と竊取は殆ど絕えた。只忍耐力養成

はなか〳〵六かしいけれども、之も稍教育の實をあらはして居る。

私は右等の事を伺ひまして誠にさま〳〵の事を感じました。左に入院後大に變化した少年の一二を記しまして此記を終ります。

ある一少年は腸拾をする傍、不正の事をなし、拘留の處分を受くる事二回、或慈善會に収容せらるゝ五回で五回逃走し、最後に此部に來たのである。彼今は此部で最も善良な者の一人で、好んで書を讀み、言行正直、常に前非を悔いて自ら勵まし、後日文筆で衣食せんことを期して居る。

ある一少年は掏摸の仲間で、多くの同類があつた。此部に送附の途中も幾度も逃げんとして果さず、院に着して後も洗足の時に逃げんとして是亦果さなかつた。それが今では温和で、よく學事を勉強し、更に又前生活の痕を止めて居らぬ。

八丈嶋の風俗

や　て

世の人は八丈島と云ふと、本島とは丸で異つて草木から人間まで、皆奇態な珍らしいものばかりなので、此の島へ行くのは丁度淺草の花屋敷でも見に行く樣だなどゝ思ふて居るが、之は大變な考へ違ひだ、成程草木などには本島のものと種類の異つたものも幾らかある、又本島では氣候が寒いので大きくなちぬ草木も、八丈では隨分大きくなつて居るけれども、此の島は小笠原嶋や臺灣などの樣に、冬のない程暑い處ではない、どちらかと云へば、房州や紀州などより幾らか暖かいと云ふ位な處で、氷も、霜も、雪も、皆見られるのだ、

氣候が餘り本島の南部と異らぬのみか、人間が同じで、職業即ち生活法も變りはない、且つ昔から小田原領となつて居たので、本島と大体が似て居る、其れ故、八丈の風俗と云ふても、別段に大した變りはない、唯だ八丈は海中の孤島で（東京から海上百二十里餘南）ある故に、今日まで昔からの風俗習慣が變らずに殘つて居るものがある。之が吾々に目新らしく見える。そして歷史の上で過ぎ去つた事柄として、風俗習慣などを學んだ時に面白おかしくありし昔の狀態を心に畫いたものと、間々一致するものがあるので、甚だ面白い。

八丈島は周圍十五里斗りの小さい島で、山ばかり多くて、平地は少しもない、唯だ大きな高い山と山との間の少し開けた谷間の陵の上に村が五つある。そして此處に今日では一万口より餘分の人が住んで居る、其の中男子は野に、山に、或は海に出て、日々營口の道に務めて居る、女子は家に居て世に名高い八丈絹を織る、また家事の働きをもする、從つて男子は海岩の漁夫同樣に筋骨も逞しければ、色も黑い、併し女子は海女ではない、彼の窓の內ちに機を織る纖手の人で、優しい姿を持つて居る、此處に甚だ不思議に見ゆることは、八丈の人の顏色が男女を問はず誰れとなく皆蒼白いことである、自分には食物の故と思はれるけれども、確かには判斷がつかない、若し生理學者が研究したならば、又別の理由があるかも知れない自分はこの顏色の蒼白いことに氣付いた時にひそかに思ふた、八丈の人には『花の顏』といひ『紅顏の美少年』など云ふ類の多趣なる文句の解釋は必ずなし難いであらふと。

先に食物と云ふたが八丈には水田が少ない、從つて米か僅かしか穫れない、そこで島の民は島に出來る穀菜を食べて生きて居る、牛もかなり多く飼育して居るが明治八年頃まで牛を殺すものは死刑に處せられたので、今に此の島に肉食は盛んでない、島の内で三食の中一食だけ米飯を取るものは財産家のうちで、普通の人は甘藷を常食として居る、又甘藷を「ランビキ」にかけて取つた燒酎がある、之は八丈の人が男女を問はず本島の人が茶を飲む樣に飲むのだそうだが、原料の香が殘つて居て餘り甘くもない、餘計なことだが氣候の暑い處に住んで居る人は「アルコール」分の少ない酒では醉ことが出來ぬと見えて、小笠原島の人も「グランデー」に似た甘蔗で釀つた酒を平氣で呑んで居る、米で釀つた酒は「お米のお酒」と云ふて土地の人はたいへん珍重して藥だなどと信じて居るが此方の白鹿や正宗などは好かない、其は「アルコール」分が少ないので醉はないからだ、小笠原島の米の酒は土地の人が呑んで醉ふやうに釀つてある。

衣服のことだが、男子の服裝は別に變つた處がない、唯だ婦人が平常巾一寸位の細い紐を帶の代りにしめて、長い着物をきて居るのはまことにしだらなく見える、男女一般に履をはかずに跣で何處にでも行く、併し婦人も盛裝するときには東京の婦人と少しも變りはないので、羽織もきる、帶もしめる、足袋もはく、表つきの下駄もはく、殊に此の島の婦人は髪の毛が多くて長いので、髪の結ひ方などは中々に進歩して居る、因みに云ふが八丈島には五尺の身丈けを度つてまだ一尺餘りも

地を曳く程の髪長の婦人がある、併しこれは島内でも珍らしいので、一村に二三人位のものである

家屋の造り方も大体似て居るが、此の島には瓦をこしらへる土がないので茅に似た草で屋根を葺く、そして草を締める藷縄がないから凡て竹を縄の代りに用ひる、併し縄で締めるやうに草がギシと締まらぬ、從つて雨が漏り易い、其れ故屋根の勾配を急にして早く雨水を流す工夫がしてある、家の建坪が廣くて屋根の勾配を急にするから、屋根は釣合かわるい程高くなる、其の上八丈島では風が荒いために成るべく家の全体の高さを低くする必要がある、併し屋根は前述の理由で低くは出來ぬ、そこで據なく軒から下を低くする、それ故五尺三寸に足らぬ男が入るにすら其の頭が屋根の端を掠める程低く下つて居るので、一寸離れて見ると屋根斗りの家が立つて居るやうに見える、家の内は床は張つてあるが疊のある家は先づない唯だ板の上に薄べりが敷いてあるのみで誠に薄暗い、氣苦しい、陰氣な住居だ、こんな造りの家が一屋敷に大抵二棟位あるが、其の一棟は多くは牛小屋である、屋敷の周りには必ず高さ四尺巾三尺位の石垣があるのは家の形ちの奇妙なのと共に一種の奇觀をなして居る、これも防風の爲めである

此の島の人は質朴で、そして東京や大阪などの人のやうにセワ〳〵してゐない、誠に緩つくりしたものだ、三四十の歳になつても闘牛や踊のやうなことを喜んで居る、祭りとか、祝ひ日とかがある頃には十日も廿日も前から毎日其の日の仕事が終ると祭りの用意に取りかゝるのだ、總べてこんな暢氣なことをして居らるゝやうな單純な土地

拵なので、人の面相までぼんやりできて居る、面相が表はす處に虚はない、心の中も其の通りで愚直で働きがない、人を詐り、或は人の物を盗むとか、奉助を働くとか云ふ惡い事は少しもない、それ故に夜寢るにも鍵をかくることもしない、まことに平穩なものだ、由來質朴とか、暢氣の生活とか云ふことは世の開けない人文の發達せぬことを示して居るものであるが、近年一ケ月一回の定期航海が東京との間に開けてから、此の島の人にも漸く夜の明けたやうな處が見える、是れと共に滔々たる今の世の下劣な忌むべき風も這り込むことだろふと思ふ、一日小學校の小供を見たが、女子の袴を着けて居るのは此の島の島司の子で、餘の子供は一人も袴をつけて居なかつた、思ふに海老茶の袴で此の島の人目を驚かせたものは、此の島司の子であつたであろふ、そしてはしなく之れが魁となつて直に海老茶の袴も此の島に擴かることであろふ、其から土地の若者が俗謠を歌ふのを聞いたが、八丈特有の歌と東京あたりの下流社會に流行する卑俗なものと半々位である、恐らく此の八丈島特有の歌も間もなく年寄の口にのみ歌はるゝことになり、遂には歌ふものがないやうになるであろふ、斯く彼れ是れ思ひ合せると今から三五年後ちの八丈島の移り變つた有樣が想像される果して美くなるであろふかどうだか。

八丈の習ひとして特に注意すべきは結婚の仕方である、結婚は自由結婚で、女子は嫁した後も夫の家に行かない、生れた家に娘の時と同じやうにして居る唯だ嫁してからは晝の中丈けは夫の家に稼ぎに行くのみだ、そして四五年もたちて子供の

二三人も出來てから、始めて夫の家に行くのもある、此の如き風習であるから八丈には一家に廿人以上の家族がある家は珍らしくない、併し家族が段々增すと分家する、若し八丈島の人が家の系圖を作りたなら、寧ろ女系のものに近かいものが出來ることだろふ、此の風は我國古墳時代の結婚の風に似て居ると思ふ、女子が分娩する時に少しも他人に厄介をかけたり產婆の手を累はすやうなことがないさうだ、之も醫學上の研究問題であろふと思ふ、男女間の關係に至つては甚だ紊れて居る。

本島との交通が定期にあるやうになつてから、言語の上に大變動が起つた、今日では島の人は東京の言葉ならば大抵は通辯がなくとも了解する、併し小學校の小供を除けては曲りなりにも東京の詞を用ふるものは甚だ稀だ、土語は吾々には少しも分からぬ、ある日畠に仕事をして居る人に道を尋ねたことがあつた、向ふは此方の言葉が通じるので色々丁寧に敎へて呉れるけれども、なんだかガヤ〳〵聞えて話がわからぬので當惑した末、遂にはんとうに分つた樣な風をして有難う御座いますと云ふて逃げた事があつた、話の通ぜぬことは凡そこんなものだ。

（終り）

秋星窓日記

北濤野人

十月三日のことでありました。例の如く夕方になつてからふ隣の靜ちやん（今年六歲）が僕の妹の所へ遊びに遣つて來ました、丁度その時妹が何處かへ遊びに出て居らなかつたので靜ちやんは大分落

膽したやうな風をして庭の眞中に立つた儘しばらく何にやら考へて居ましたつけが軈て、庭の隅に美しく咲いて居る秋海棠の花を見つけまして今度は花の美に打たれたらしくつくづくと眺めて居りましたつけが徐々と秋海棠の傍へ行きますから

何をするかと凝乎として僕が見てゐますと靜ちやんは僕の見て居るとも知らずに、その中で色の美しい花を一輪そつと採りましたから。

『アラ、靜ちやんは花を採つて、お月さまの罰が當る。』と僕が言ひますと、突然なので吃驚したらしい顏で。

『お月樣は見て居やあしないわ。』『嘘いつてらァあすこにお月樣がチヤント見てるぢやないか。』

靜ちやんはヒヨイト振り向いて見ましたつけが、その時丁度鎌の如に細い三日月が雲と雲との間から好く見えたので心配らしさうに、頻と柏手して三日月を拜み初めました。

靜ちやんは母さまや姉さまのお話に依つて平常からお月樣は神樣だと信じて居たのでしたらう。又惡い事をすれば神樣のお咎めがあると言ふ事も知

つて居たのでしたらう。而し罪を悔いて神樣に謝すればその罪は消滅すると言ふ事も信じて居たのでしたろう。

と思ひました時に僕は、靜ちやんの淸い心と、尙かつ六才の子供でさへも斯樣なる考へを持つて居るかと何となく感じました

東京の十二月中行事

せく生

何事につけ、はでを競ひ、だてを爭つたる大江戸も、維新といへる一紀元を境として、萬事萬端破壞主義の大打擊を蒙つたれば、舊幕時代には盛に行はれたりし年中行事のごときも、やうやく社會に遠かりて、大方は廢滅に歸したれとも、茲に一のおもしろきは、この十二月に限つて中々に舊幕の面影の殘れるあるを見る事なりとす。

扨今其の色々の年々の儀式、月々の行事を今日の社會に實行する利害の議論は別として、聊か維新前後如何なる事の行はれたるかを回想するも、又一しほの慰なるべしと思ひ、時節柄一二のことをしるすなり。

(一)川浸餅　本月の朔に家々川浸餅といふを製して之を食ひ、水難を避くべしといへり。此は又乙子餅又は弟兒餅といふ。

(二)事始　八日になれば、家々、芋、人參、午蒡、蒟蒻、大根、赤小豆にてお事汁といふを煮て食ふ又お事笊とて物干竿の先などに目笊をかけて、屋根の上に捧たる所もありき。この事は言傳に「昔源義家奥州征伐を本月八日に始め、二月八日に平定せり」といふ事より起れりといへど當にならず

ず。

(三)煤拂　十三日には大抵煤拂をなせり。今は特にこの日と限らずして、天氣を見計ひ、この月の下旬に行ふ。只商人は晝間の店を閉ぢず且煤塵を街上に飛はさゞる爲に、夜間之を行ふ。

序に將軍家江戸城内の煤拂を語るべし。

十二月十三日は表方奥向一統にこの事がありまず。兩方とも年男といふものが其の任に當ります表方の年男は御老中の中で勤めまして此方にはさして變つた面白い事もありませんから　やめまして、奥向の方を一通り簡略に申しませう。それはまづ室々　女中「お末」など、申す者が實際の煤拂をする事は下樣と聊の差はありませぬ。之がすんだ所で、御臺所即大奥の女王は、其の簾の前に留守居武士の中の最高年の一人を召させられまして、老女表使などの役女の方々立會の上年男に任命するのであります。この男は初め御前に出づるに、熨斗目麻上下といふいかめしい裝束でもつて、謹んで簾前で老女に對して坐しますと、竹の先に藁で作つた煤拂捧に、橙、海老、昆布、根松柑などを飾り付けた物を老女は恭しく三方に載せまして、それを年男にわたし、「明年の年男を仰付く」と言渡しますと、年男は謹でこの辭令を承り、その煤拂棒を受けとつて二の間に下りこれを下男に渡して再び前の座に歸へります。其の時に控の年男つゞいて座に通りまして、前の年男と同じ命をうけます。之は副年男であります。

この時切熨斗土器等の載つた三方の三を持出し銚子を取る者か左右より酒を賜ふの式が終はれは今度は表使の役女「お次の方」と呼ぶのを相圖に次

の間から三四十人の役女打揃つて飛出して來て、襠褲をば脱ぎ捨て、やにはに年男と捻とを引捕て高く差上げ「これは此方の大黒柱石の土臺の腐るまで」雲に棧、霞に千鳥なぜにとゞかぬ我か思ひ」といふ歌をうたうのであります。年男のどうあげといふはこの事であります。これがすみまして年男は其の煤拂棒で間でと〳〵の天井に水といふ字を書く眞似をして退出いたします。これで式が濟みまして、年男は祝儀として金一枚を賜はり其の外の式にあゞかつた人々へは金壹分つゝを下されます。又此の日は一般に御料理を下されますけれども、其の不味鹽梅は殆ど食べられぬ程ださうであります。これは毎年の例で表方も奥向もこの日に限つては別段甘くなくするをよしこすると申します。其の料理の品々及び不味にする理由はくどくなるから省きます。

（四）年の市　十七日の朝より十八日の夜にかけて淺草觀音に名高き年の市あり。今は非常に衰へて殆と昔の影をも止めずといへども中々雜沓す。其の市は注連飾を始として新年に用ふる祝儀の器具破魔弓、手鞠、羽子板等を尤多とす。又翌十九日は雷門裝束市とて裝を商ふ市ありしも今は只名のみを聞く。この外神田明神、深川八幡・芝愛宕、麹町平川天神、兩國藥研堀等夫々日を異にして同樣の市を立つれど其の繁華は遠く淺草に及はず。されとも三四年前の神田明神の年の市には二十余人の死傷者を出せし程の雜沓ありき。

（五）別歳　二十五日より親戚故舊のものを招き、饗應する事を別歳といへり。今は之を忘年會と稱して廿八日頃は諸官省皆一年間の政務を整へ終

はるを以て、各所の料理店會席等は諸役人の別座所として大に賑はうなり。

(六)賃餅と引摺餅　「ちん餅仕候」の招牌は近來大に米屋、菓子屋しる子屋等の前に見ゆ。維新前には引摺餅と稱し、十五日より數人の壯者は身輕の出立にて、竈、釜、蒸籠、臼、杵薪其他一切の餅搗道具を運搬して街上をねり行く。家々は米を出して之に依頼す。搗き終りて搗料と祝儀とを得て立ち去る樣、勇ましとも賑はしかりき。今は殆なし。

(七)歳暮。これのみは今尚昔のまゝなり。鹽鮭等の如き品物を盛に贈答す。昔は小供の生れたる家には破魔弓羽子板等を贈る事ありしが今も尚羽子板のみは贈答するものあり。

(八)かまかり松。昔正月に飾るべき松を「飾り松や」「鎌狩餅や」と呼びて、市中を賣行きたり。今は無し。「鎌かい」は下總國「かまかい」近傍より多く伐り來りしより何時しか訛りて「鎌にて刈る」の「かまかり」に發音せられしならん。而して各所の河岸、橋際などにて注連、飾松竹、橙、譲葉、裏白、海老、勝栗、乾柿、昆布、蜜柑又は福壽草梅等の早咲き盆栽を商うは今も昔と變はるとなし、(右飾物の話は本年二月の本誌にあり。)

(九)節季候　本月に入れば、藺にて編みたる異樣の編笠を冠りたる三四人打連れて、太鼓を打ち、三味線をひき、「四つ竹」を打ち、拍子木を叩きつゝ、拍子おかしく「さぞろホラ〳〵毎年まいとし旦那のお庭へ飛込めはね込め」などの文句を唱へて、家々を廻る一種の乞丐ありしが、今は極めて希なり。

（十）大晦日　この日は實にうるさい日なり。借金取も今日を限りと鶯の聲らしくもなかるべく、昔の人も足を空にしてといふ程の日なれば、何事もこの日の中にとて、物買はんと駈けまはる人、賣り付けんとにや街上に叫ぶ店々の聲、織るが如き人々の行き來する中を、遠慮會釋もあればこそ、ふ惡魔拂ひ、厄拂ひ、ピー〳〵ドン〳〵の大神樂足よりも肩よりも、耳と目の疲るゝは今日なりと昔は誰もいひき。今も殆然り。夜に入つて尙、商家の高張提灯は電氣燈瓦斯燈と相俟つて、宛ら不夜の巷なり。この夜九つ時（十二時）の百八の鐘音！やがて撞きおはる頃、天地しばらくまどろまむのみ。

（十一）節分　今は大抵二月なれど、維新前には「年の內に春は來にけり」といふ事ありて、多く十二月中に節分ありき。即ち立春の前日にて、此の夜を年越といひ、おもしろき追儺即鬼遣ひの式あり

（この事は本年三月の本誌に記したれば見られよ）

（了）

他を批評することに就きて

（下）　野本生譯

吾人は、他を批判することの極めて困難なるを悟り、深く、之を心に銘すること原より善し。而も吾人の世に處するや、之れが批判をなさゞる能はず、否、時としては、匆忙、繁劇の裡に、これが鑑別をなすの必要あるを如何せん。但、其の判別の材料となるべきもの、必ずしも、常に、深奥幽玄の胸底にのみ潛伏せずして、却て、外面皮相の間に於て、更らに、優力なる事實の吾人の注意

せざるものあることを知らざるべからず。人間本來の性情は、日常の小事によりて判別し得らるゝこと多し。蓋し、日常瑣事の行爲は、殆ど、無意識の間に行はるゝこと多ければなり。されば、箇人に對する正しき批評は、善く是等の事物を觀察するにあるなり。吾人は、其の經歷によるよりも直接小時の對談による方、却て能く、其の人と爲りを識ること多し。是れ、其人に於ける幾多主要なる行爲は、其人本然の意識表示にあらずして、多くは、其の性情以外の他の動機に起因せる事あるが故なり。予は又、他を識別するに當て、其の主要なる行爲の二三を以てするよりも、寧ろ、其の本人の肖像に對する方、却て、眞を得るの近きやを疑ふものなり。人の性癖は、其の面貌、態度其の他一般の動作の上に顯るゝことなしとせば、

吾人の世に立ち、人に接するに當て、其の鑑別に苦しむこと、果して、幾何ぞや。

人を判定するに際しては、其の品性、智力中の容易く判別し得べきものと、然らざるものとを區別すること肝要なり。智力に關しては、吾人は、直に、其人、機智、敏才、若しくは、論理的頭腦を有せるや否やを知るべし。然れど、其人、果して、判斷力に富めるや否やを知るは容易ならず。猶又、其の人の實務的智識の有無を判ずるに至ては、亦、多少の研究を要すべし。是れ、全く、高尚なる道德上及び智力上の兩性質の綜合せる結果に外ならざればなり。德性に關しては、吾人は直ちに、私慾、自尊、大言等を看破すること容易なり。眞實を輕んじ、虛言を意とせざるの性癖も亦日常の瑣事の間に於て、是れを視ること難からず

之に反して、公平明確に、其人の氣質を會得するは、深く、之れと交り、よく、其人と爲りを精査するに非らざれば極めて困難の事なり。人の嗜好は、或は、外部に在て、露出し、或は、內部に潛在す。蓋し、人、其の嗜好を語るに際しても、胸底、猶、其一部を藏して顯はさゞることあればなり。人の感情を察すること古來難事に屬す。一國猶、其の感情を表示するの樣式一ならず。況んや箇人をや。

人を判定するに當て、特に陷り易き二三の場合あり。假令ば、吾人、若し、俗に所謂氣取るところの人物に遇ふ時は、心中、不快を感ずるの極、其人實際の欠點以上に値するの嫌忌を以て之を厭ひ、彼れ、吾人を輕蔑すと速斷すること多し。而も、彼れの行爲は、却て、我等が一瞥の眷顧を蒙ちんが爲の苦心に過ぎざることあるなり。又、玆に人あり。其人、常に、外方に向て、其の性癖の最惡なる部分を露出し、他の威嚴を傷ひ、人の恐怖するところとなる。吾人、此種の人に遭遇するや、唯、其の外面の行動に眩みて、彼等、尊大の下、却て、掬すべきの溫情を堪へ、倨傲の裡、汲々として唯、人心を得んと勉むるものあるを悟らざることあり。又、其の性質の吾人と全く相異れるが爲め、判別の方法手段の採るべきものなきことあり。即ち、諧謔の才なきもの、諧謔の人を鑑別するの至難なるがごとし。人を識別するに際して、過失の陷り易きもの甚だ多し。而も、其の最も大なるは、我等身邊の家人子弟を判定する時に陷るところのものなり。家人子弟は、我等が其の身邊に嚴く注意することを熟知して、常に、我

等が意を迎へて行動するが故なり。彼等は、世の主たる我等に心を置きて、其の内心を明かさゞること多し。然れば、我等は、恰も、霧中に彷徨し生ける幻像と坐するが如く、談決して、巷間の雜話に出でず。偶〻此以外を語るといへども、彼等は、唯、劇場に於て、一定の脚本を演ずる俳優に過ぎず、其の臺詞に應じて、種々なる身振を爲して、之れを補足するのみ。其の胸奥を吐露するが如きは、狂氣の沙汰として、之を忌憚す。而も猶吾人は、好く、彼等を解せりと思惟す、何ぞ其の誤れるの甚しきや

十二月の和名（しはす）と其の異名

せ　く　生

しはすにはあわ雪ふるとしらぬかも
梅の花さく含くめらずして（萬葉集）
なにとなくしはすの空となりにけり
あはれかさなる年の數かな（秘藏抄）

この歌のごとく、十二月は「しはす」といはれました。「しはす」といひますのは、歌の詞にばかり限つて用ゐられたのではなく、平生の談話にも、又何に書くにも昔は其の通りでありまして、十二月と言つたり、書いたりするのは餘程後の事であります。この事は「しもつき」「かみなづき」など凡てさうであります。

さて何故この月を「しはす」といふかと言うに、彼の清輔朝臣が「十二月には僧を迎へて御經を讀ませ、東西に走せ走るが故に、師走月といふを誤まりて師走といふなり」と解釋せられたのが最も

早い事でありまして、此の後鎌倉時代、南北朝、足利時代、織豐時代を過ぎまして、德川の第六代將軍の頃になるまで、凡六百年の間は、然ういふわけと人々が信じて居りましたが、此の時の大學者白石新井君美といふ先生は、深くこの語の本をかんがへまして、其の東雅といふ本の中に「しはす」のしとはとし(年)といふ詞の一度轉ぜしものなり。はすといふは、はつ(果)なり。すはつの轉ぜしなり。我が國の語には凡ての事の終りをば、果とも極とも云ふなり。然れば彼の萬葉集にも極の字を書きてはつと讀ませたれば、俗に極月の字を用ゐてしはすといふなり」。と書かれました。これから後の學者は皆この說を信じまして、十二月は一年の年の果で年果がしはすとなつたのだと申します。

そこで十二月の事を廣く一般にしはすと申しました外に鎌倉時代の定家大人、長明顯昭の諸師等の歌詠の先生方は色々の異名をつけました。

三冬月

豐なる時ぞと見えて三冬月　いそにつもれる雪ののどけき

春待月

くれてゆく年は身にそふ老なれど　春待月のいそがしきかな

梅はつ月

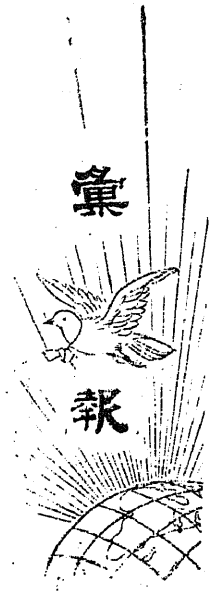
花いまだつぼむ枝かとほのみえて　梅はつ月の心いろめく

暮古月

このはなの今や咲くらむ難波がた　くれこの月のころになりつゝ

おやこ月

われ人のみたまをまつるおやこ月　松やいのちのためしなるらむ



華族女學校行啓

皇后陛下には豫て仰せ出されたる如く先月十七日午前九時御出門永田町なる華族女學校へ行啓あらせられたり。當日御覽に入れ奉りし全校生徒の運動順序は左の如し。

唱歌　學びの園　初等中學全體、高等小學第一、二級
唱歌　御代の榮　初等中學全體
第一　ポソネーズ　初等小學第二、三級
第二　毬遊び毬門毬投げ　初等小學第三、一級
第三　遊戯　幼稚園幼兒
第四　平衡運動、羅旋運動第二　初等中學第三級
第五　啞鈴體操(アンヴイルコーシス)駈足　初等中學第二級
第六　方形運動第一、進行其一　初等中學第一級
第七　毬籠二種　初等中學第三級
第八　救難競走　高等中學全體、附屬高等小學第一級
第九　デザーボール　初等中學第一、二級十六名
第十　矯正術、表出體操(トピクルトンボ)　高等小學第一、二
綱越し、進行其二
第十一　鐵啞鈴體操、體の屈伸、暢骨運動　高等中學第一級
第十二　豆囊競送　初等小學第二、三級
第十三　ローンテニス　高等中學第一、二、三級十六名
第十四　投毬競爭　高等小學第一、二級
第十五　踵趾運動、柱選り、唱歌(凱旋)　初等中學第三級、高等小學第三級
第十六　遊戯　幼稚園幼兒
第十七　蛇行進　初等中學第一級
第十八　舞(菅公小島)　高等小學第一、二級
第十九　綱飛八種　初等中學第二級
第二十　器械體操　初等中學第三級　高等小學一、二級十五名
第廿一　方形運動第四、進行其三　高等中學全體
第廿二　後ろ送り　高等小學第三級　初等小學第一級
第廿三　稻千競爭　初等中學全體
第廿四　ホソイトリー氏體操　高等小學第三級十八名
番外(綱引)卒業生　唱歌(君が代)生徒全體

右終て午後四時二十分還啓あらせられたりと。

●女子高等師範學校　同校に於ては、例年の如く先月初旬より、數組に分れて四年級生徒を、日光に修學旅行せしめたりといふ。▲如蘭會　先月十九日午前十時より同會總會を開きたりとの事。▲送迎會　同校音樂教師奥好義氏は先般其任を辭せられ又洋行中なりし同校教授下田次郎氏は先月十七日歸朝せられたるにより先月廿九日午後五時より生徒一同送迎會を開きたりといふ。▲幼稚園運動會　先月廿五日午前九時より幼稚園にては父兄懇話會を開き同時に運動會を開きて參觀せしめられしとの事なるが其順序は左の如くなりし由。

（一）　會集……全体
　（イ）唱歌　つばき
　（ロ）仝　鳩ぽっぽ
　（ハ）お話
（二）　花輪……一ノ組
（三）　遠音のラッパ……二ノ組
（四）　てふ〳〵すゞめ……三ノ組
（五）　徒歩競走（旗取り）……一ノ組
（六）　廻り鬼……二ノ組
（七）　家鳩……一ノ組
（八）　徒歩競走（毬拾ひ）……二ノ組
（九）　蓮の花……三ノ組
（十）　戴靈競走……一ノ組
（十一）　池の鯉……二ノ組
（十二）　輪拾ひ……三ノ組
（十三）　毬送り……一ノ組
（十四）　綱引……一ノ組　二ノ組
（十五）　一人一脚……一ノ組
（十六）　競馬……一ノ組　二ノ組
（十七）　桃太郎　うづまき……仝　体
（十八）

●東京音樂學校　同校秋季演奏會は、先月十六日午後一時半より開會したり。何れも見事に演奏せられたるが中にも、ハイドリッヒ氏のピアノ獨彈幸田教授のバイオリン獨奏は、さずがに聽衆を感動せしめたること深く、生徒青木兒氏及柴田女

生徒の獨唱は、最も素人の耳にも適當したるが如く滿場の喝采を博したり。

●女子東京美術學校　今回新校舍落成したるを以て、先月二十二日正午より開校式を擧行せり。先づ湯本前校長の挨拶につぎ、現校長藏原惟廓氏の熱心痛快なる演說あり、夫より辻帝國敎育會長、井上文學博士の演舌、千家知事、松田市長の祝文等ありて、此間にピアノ、オルガン、バイオリン等の演奏ありたり。當日は頗る盛會にて、來賓式場に充ちて尙廊下等にも溢れ居る樣なりき。敎場には悉皆成績品を陳列しありしが、本年一月より授業し來りたる割合には、技術の巧妙最も見るべきものありき。尙其翌日及翌々日の兩日間生徒成績展覽會を開きたり。

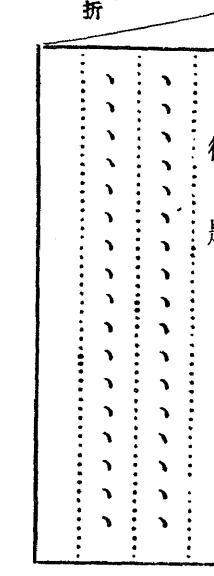
●婦人讀書會　此程有志の婦人方が設立せられたる同會は、婦人相互に讀書を奬勵する主旨にて、一日間少なくも三十分以上の讀書を爲す規約を結び、若し其規約に背きたるものあればこれに罰金を科し、之をつみて會費と共に新著購入費に充つる趣向の由。去月廿二日麴町區平河町五丁目なるミス、バーカー氏宅にて發會式を擧げたり。

●足利幼稚園　會員下野足利町鑁阿寺學頭山越忍空師の設立にかゝり、會員關姉之が主任保姆として本年一月に開園せられしもの、目下幼兒の數七十五名あり、先月廿二日父兄懇話會を開き、東京より東基吉氏臨席して保育上の談話をなしたる由なるが父兄よりも保育上につきての種々の談話質問等も出で、中々に珍らしき盛會なりし由。尙仝會は每年春秋二期に開會の筈なるが、目下母

親の側にて、保育會なるものを設け次回よりは其の發起によりて幼稚園の懇話會をも開かんと熱心に計劃せらるゝ向もありとか、至極の美擧といふべし。

●歌御會始御題　明治三十六年歌御會御題は「新年海」と仰出され詠進書式幷に期限等左の通定められたり

料紙は檀紙　奉書、杉原紙又は美濃紙を用ふ
詠進は一月十日までに宮内省御歌所へ差出す可し
但一人一首に限る



裏面書式

某府下某國某郡某町村住
某縣下某市
華士族又は平民
苗字
官位勳功爵を有する者は苗字の上に記載すべし

●學生々徒の敬禮法　帝國教育會は曩に文部省より諮問したる學生々徒敬禮法に關し評議員會を開き左の如く決定し直に之を答申せりといふ。

▲立禮、男子普通の立禮は姿勢を正し、帽を右手に持ち　兩手を垂れ、体の上部を少しく前に傾くるものとす、最敬禮にありては兩手を膝の上まで下ぐべし、女子の立禮は男子に準ずるものとす。

御眞影を拜するときは、御室に入り最敬禮を行ひ、更に指定の場所に進み　最敬禮を行ひ、其儘に三歩退きて右旋し、御室の出口に於て最敬禮を行ひ、然る後退きて退歩す、但多數一同にて御眞影を拜するときは、一齊に最敬禮を行ふものとす、途上に於て行幸啓に逢ふときは、前驅の稍前より道路一側に停止、正面して帽を脱し、車駕六歩前に近づかせらるゝ時最敬禮を行ひ　六歩過ぎさせらるゝまで此姿勢を保つべし。

▲坐禮、男子普通の坐禮は兩手を八字形にして、膝の前に置き、体の上部を前に傾け、頭を坐面より凡五寸の所まで下ぐるもの

とす、女子の坐禮は男子に準ず。

●教員檢定試驗本試驗問題

◎習字科

揮毫

一、律己貴廉勤御事要明斷

二、高砂住の江の松も相生のやうにおぼえ男山のむかしを思ひ出でをみなへしの一時をくれるにも歌をいひてそなくさめける。

三、靜座觀空除念調息以洗心養心不禪不玄政有淵致

四、白雲にはねうちかはしとふ雁の數さへ見ゆるあきの夜の月

（第二、第四問本字假名とも適宜の字體を用ふべし）

教授法

執筆指法は師傅と習慣等により種々あるべしといへども普通教育上如何なる法を最も宜しとするや（圖を以て示すも妨なし）

右揮毫教授法を通して三時間

◎數學科（代數幾何）

午前の部

1、458.9276 と 67.58423 との積を 0.0427 と 0.5839 との積で割りて商を百の位まで算出せよ。

2、溢れつゝある井戸あり、水は絶えず一樣に涌き出るものとし四個の喞筒を用ゐる時は十五分時間に其水を盡すべく、八個の喞筒を用ゐる時は七分時間を要すとする時は、之を五分時間に盡すには幾個の喞筒を使用すべきか

3、次の方程式と不等式との一組を解け

$ax-by=1,\ px+qy>1,$

茲に $a,b,p,q,$ は何れも正の實數を顯はすものとす

4、次の方程式

$x^2-(8a-2)x+15x^2-2a-7=0$

の根の平方の和が 24 なる時は a の値如何

答案は一問毎に別々の紙に記し且つ毎葉姓名を記すべし

午後の分

1、三角形 ABC に於て D, E, F を夫々邊 BC,CA, AB, の中點とし、A を通過する任意の直線が DE 及び DF と交る點を夫々 M,N とすれば CM と BN とは平行なり、之を證明せよ、

2、A は與へられたる圓周上の一定點なり、今其の圓外の點 P より A に至る距離 PA の、P より引きたる切線の長さ PT に對する比 PA:PT が不易なるとき、P 點の軌跡を求む、

3、正六角形 ABCDEF を底面とし或る一點 O を頂點とする所の角錐を一つの平面にて截り、頂點と底面との間に於て六つの斜稜と交らしむれば、其の截り口なる六角形 A′B′C′D′E′F′ の A′B′ 邊及び D′E′ 邊の交りと、B′C′ 邊及び E′F′ 邊の交りと、C′D′ 邊及び F′A′ 邊の交りとは皆同一の直線上に在り、之を證明せよ、

高等女學校、女子師範學校、師範學校女子部のみの教員志願者は問題3に答ふることを要せざる代りに次の問題3＊に答ふべし

3＊、空間に於て四點ABCDあり、ABの中央點とCDの中央點とを連結する直線はADの中央點とBCの中央點とを連結する直線と相交ることを證明せよ、

以上二時間　（つゞく）

●幼稚園と近視眼者增加との關係　と題して近刊の新聞に左の如く見えたり。近來歐洲諸國にては近視眼者の數著しく增加したる由にて眼科醫は其原因に就きて切りに調査中なるが倫敦キングス、コレージの眼科教授マックハーデーの說に據れば斯く近視眼者の增加したるは現時の幼稚園制度の然らしむる所にして幼稚園生徒が光力の不完全なる室に在りて種々なる色紙に視力を費すは非常に害ありことなり余の調査したる所にては近視眼者は幼稚園の設けある大市街に多く少年の時に視力を讀書等に多く使用せざるものは視力の優れるを見るなり云々

吾人は其果して然るや否やは知らざれども、兎に角不完全なる室內に於て長く幼兒に作業を命じ、以て單に筋肉手指の練習とか、感覺の練習とか稱して形式的効果にのみ心を傾くる保育法の、有益無害なる所以は知ること能はざるなり。

會報

入會之部

東京本鄕區森川町壹番地早川龍介方　田村すみ
牛込區市ヶ谷佐內坂町九　鈴木重子
岡山市深抵幼稚園　小畑眞佐
岡山市清輝幼稚園　山田竹
岡山市環翠幼稚園　高木萬壽
岡山市弘西幼稚園　古田重
岡山市內山下石山　谷久萬
岡山縣師範學校附屬幼稚園　岡康

岡山縣師範學校附屬幼稚園　杉本園
東京日本橋區蠣殼町三ノ三　加納てる
淡路國志築町　神代まさ
東京下谷區櫻木町、一　三好スヽ
仝　上　永井アイ
淺草區松清町四〇德風幼稚園　八田さだ

改姓之部

羽田改　北野晴

轉居之部

廣島市大須賀村八五山崎源太郎方へ　吉田たみ
神奈川縣鎌倉郡川口小學校へ　平岩繁治
和歌山市北ノ新地東ノ丁六へ　若尾久壽
和歌山市五番町戮判所北横　宮本こすゑ
清國北京朝陽門内羊尾巴胡同へ　服部繁子
東京麴町區元園町一ノ三三へ　早川いし
大分縣北海野郡臼杵町　北野晴
東京本郷區金助町一番地へ　中村五六

會費領收　自十月二十六日　至十一月二十五日

一金壹圓　自三十五年二月　至三十五年十一月　宇佐美春
一金貳拾錢　自三十五年十一月　至三十五年十二月　鈴木重子
一金六拾錢　自三十五年十一月　至三十六年四月　谷久滿
一金貳拾錢　自三十五年十一月　至三十六年十一月　小畑眞佐
一金貳拾錢　自三十五年十一月　至三十六年十一月　山田竹
一金貳拾錢　自三十五年十一月　至三十六年十一月　高木萬壽
一金貳拾錢　自三十五年十一月　至三十六年十一月　岡康
一金貳拾錢　自三十五年十一月　至三十六年十一月　杉本園
一金貳拾錢　自三十五年十一月　至三十六年十一月　古田重
一金五拾錢　自三十五年十一月　至三十六年十二月　鈴木てる
一金壹圓二拾錢　自三十五年十一月　至三十六年十二月　小倉みき
一金六拾錢　自三十五年十一月　至三十六年十二月　吉澤さも
一金參拾錢　自三十五年十一月　至三十六年十二月　敷藤きん
一金二圓四十錢　自三十五年十一月　至三十六年十二月　矢野そう
一金壹圓　自三十五年十一月　至三十六年十二月　吉瓦ムマ
一金五拾錢　自三十五年十一月　至三十六年十二月　中野芳枝
一金八拾錢　自三十五年十一月　至三十五年十二月　井上千代
一金參拾錢　自三十五年十一月　至三十九年十二月　若尾久壽
一金五拾錢　自三十五年十一月　至三十四年十二月　福田米
一金五拾錢　自三十五年十一月　至三十六年十一月　神代まさ
一金參拾錢　自三十五年十一月　至三十九年十一月　北村きた
一金二拾錢　自三十五年十一月　至三十五年十二月　加納てる

一金拾錢	三十五年十一月	三好すゞ
一金拾錢	三十五年十一月	永井あい
一金壹圓	自三十五年八月至三十五年五月	佐藤壽鍾
一金壹圓二十錢	自三十五年四月至三十六年三月	廣瀨まさ
一金五十錢	自三十五年十一月至三十六年三月	土川五郎
一金五十錢	自三十五年十一月至三十六年三月	野尻てつ
一金五十錢	自三十五年十一月至三十六年三月	小谷野かれ
一金壹圓	自三十六年一月至三十六年十二月	東條順
一金壹圓	自三十五年十二月至三十五年十一月	中島敏
一金貳拾錢	自三十五年十二月至三十五年十二月	田村すみ
一金拾錢	三十五年十一月	八田さし
一金五拾錢	自三十五年十二月至三十六年四月	八田さだ
一金壹圓	自三十五年五月至三十六年二月	清水喜代

謹告

明治三十六年を迎ふると共に、本誌は亦將に卷を改めて、第三卷を發刊せんとす。卷を改むると共に益々材料を精選し內容を豐富にして、眞に婦人と子どもの友となり、婦人教育界幼兒保育界の光明たらん事を期す。

第三卷第一號（明治三十六年一月五日發行）

女子の忠……華族女學校々長　細川潤次郎
話しの仕方……東京外國語學校教授　尺秀三郎
兎の話……東京府師範學校教諭　佐藤禮介
黑澤登幾子……女子高等師範學校教授　下村三四吉
エドワード、ロング幼兒の誠意……米溪
幼稚園保育上誤謬の見解……記者
家庭雜感……そのこ
料理法……石井泰次郎
世界一の旅行博士……北濤野人
打出の小道具……やまとの翁
幼稚園案內……花子

以上はたゞ第一號所載の要目に過ぎず、燦然たる盛裝は乞ふ發刊を待て知られよ

新刊

女子高等師範學校教授後閑菊野先生校閲　木内たつの　谷川さく　共編

女子普通作法書

全一冊　和装　定價金二十八錢　郵税金四錢　美本

◉人類存する所交際あり交際ある所其節目儀表あり以て交際を滑澤ならしめ人世を平和ならしむれは一日も欠くべからざる也◉禮の形式は時處位に應じて變遷疏動素と一定處なしたゞ維新の際に破壞されし禮法典式は今に至つて未だ建設せられず世を擧て混亂紛糾無作法跋扈粗放横行すべき哉◉禮の精神は万古不易東西一貫なり今此精神を以て今日此處の風俗制度に合せしむるは目下の要務なり知らずや道德の修養は内外兩面に存じ國風の美華は實質形式の二面にあるを◉精神を咀嚼して今日の實際社會に合せめ質を貴び文を飾りて應用自在萬般の交際種々の楷級に應じて其宜しきを得も虐飾固陋繁雜大簡粗野は其大に好まざる所也◉作法と修身科とは密接不離の關係あり本書は即ち此處に用意せり作法の理論と形容と社會に普及せしむべし本書は是に注意せり禮は須らく一致すべし故に本書は文章を平易にし且振假名を附し密なる繪畫の容儀は文字に顯はし難き所に存す故に一々詳なり可なり參考に可なり殊に高等小學科女生徒教授細目二種を卷末に加へたるは益々著者の用意の周到なるに足るべし

女子習字帖

全四冊　定價　卷一　金十錢　卷二　金十一錢　卷三　金十二錢　卷四　金十五錢　郵税　金各二錢

からすまる帖

全二冊　定價　上卷　金十八錢　下卷　金二十錢　郵税　各金四錢

女子書翰文

全二冊　正價　上卷　金廿五錢　下卷　金廿八錢　郵税　各金四錢

古今和歌集序

全一冊　定價金廿五錢　郵税金二錢

楷書嘉言帖

全一冊　定價金十五錢　郵税金二錢

行書蘭亭帖

全一冊　定價金十二錢　郵税金二錢

行書後赤壁賦

全一冊　定價金十四錢　郵税金二錢

女子高等師範學校囑托岡田起作先生編幷書

發賣所　東京市日本橋區本石町三丁目廿三番地　金昌堂

(婦人と子ども第參卷第十二號)
(明治三十六年十二月五日發行(毎月一回五日發行)

◎◎空前の唱歌良教科書!
◎檢定濟生徒用唱歌教科書の嚆矢
文部省檢定濟

唱歌教科書

郵税一册に就き金四錢

教師用 全四册
第一卷定價金三十錢
第二卷定價金三十錢
第三卷定價金三十錢
第四卷定價金十八錢

生徒用 全四册
第一卷定價金十錢
第二卷定價金十五錢
第三卷定價金十錢
第四卷定價金十錢

發行以來唯一の完全なる唱歌教科用書として非常なる大喝采を博し僅々數月間に三版發行の盛運に會したる本書は今回其文部省の檢定を經て更に其眞價を發揮するの榮を得たり從來文部省檢定濟と世に刊行せる唱歌集は皆悉く教師用即ち教師の參考書として許可せられたるのみにして生徒用即ち眞の教科用書とし以て本書の嚆矢たるも實に檢定を經たるものは其本書か如何に該科の教授上最完全なる良書たるかを知るに足るべし

● 洋琴 金參百圓以上 貳千圓迄 各種

● ヴァイオリン 鈴木製 金五圓以上五拾圓迄 各種 舶來品 八圓以上百五拾圓迄 各種

● 樂隊用樂器 大太鼓金貳拾圓以上小太鼓八圓半以上シンバル金四圓以上其他バス、バリトン、テナー、アルト、コルネット、トロンボン等金貳拾圓以上百六拾圓迄

● 鼓隊用樂器 太鼓金貳拾圓以上 横笛金壹圓以上 ○學校用一組拾參圓

● 手風琴 金貳圓五拾錢以上參拾圓迄 各種

● 保險附 山葉風琴 定價金拾六圓五拾錢以上金貳百圓迄

○右の外兩用風琴、吹奏琴、ハーモニカ、フラジョレット其他各樂器並に和洋音樂附屬品各種

● ピアノ、オルガン 調律修繕

● 郵券貳錢御送附 目錄進呈

東京市京橋區竹川町十三番地 共益商社樂器店 (電信略號キヨ)
電話新橋五百廿九番